
盾としての運命を背負った御遣い

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盾としての運命を背負った御遣い

【Nコード】

N1780V

【作者名】

S

【あらすじ】

この外史は異形。

そのを行くのは『盾』の運命を背負った者。

その者の名は北郷一刀。

何故彼はこの外史に送られたのか？

彼はこの外史で何を見るのか？

その答えを見つける為に……

そして、守る為に……

北郷一刀は外史を行く。

一話 始まり（前書き）

こんにちわ

始まりましたよ

更新不定期ですが

よろしく願います！

では、始まり

一話 始まり

華琳 side

三国同盟を結んでから半年が過ぎていた。
今日から一週間、三国の重臣達が集まり
様々なことをして楽しむ日々が始まる。
私も思わず心が弾む。

「華琳様、蜀と呉の両国の王と重臣が到着しました」

「そう、楽しみね」

「ええ、あれから会っていませんから」

「私も心が弾んでいるわ」

「そうですか。華琳様、見えましたよ」

秋蘭が指した方を見ると
桃香と雪蓮が笑顔で話しながら
歩いて来るのが見えた。

「あ、華琳ちゃん！」

「華琳、久しぶりね」

「ええ、二人共久しぶり。報告通り」

全員連れて来たのね」

桃香が全員連れてきた理由は大体分かる。
恐らく最近話題になっているあれだろう。

「だって、華琳ちゃんも管輅ちゃんの占い聞いたんでしょ？」

やっぱりだ。

管輅の占いと言っのはこうだ。

『東方の天より流星が降る。

その流星は『盾』の運命を背負った者を
乗せた流星。その者の名は北郷一刀。

その者はいかなる者からもこの国……いや

この大陸を守るであろう。その者に委ねるが良い
汝等の運命を……その者はその期待に答えるだろう』

この予言を管輅は三国の王を訪ね言い渡したのだ。

私はそんな予言は信じなかったが桃香や雪蓮は
信じたらしい。

「あんな予言を信じるのはおかしいわよ」

「でも、興味あるじゃない。『盾』の運命を
背負った者なんて。それに強かったら
いろいろと利用価値あるじゃない」

「その占いを大陸に流して三国の象徴に
するのかしら？」

「蜀にはもう流したよ」

「呉にもよ」

「何だかんだ言つて魏にも流したのだけどね」

「早く来ないかな」

「確かこの時期に来るのよね」

管輅はどの時期に来るかは教えてくれたがどこに落ちるか等は教えてくれなかった。

「強いのかな？」

「強いじゃない？なんたつて『盾』の運命を背負つた者なのだもの」

「どんな人かな？優しい人かな？」

「……桃香楽しそうね」

「全くよ」

「まあ、そこが桃香らしいのだけどね」

「二人共！それどう言う意味！？」

「教えないわよ」

「むっ！」

「あはははっ！」

その頃北郷一刀は

一刀side

「姫、お呼びですか？」

俺は姫と呼ばれ姫の部屋に来ている。

姫の部屋は姫の『直属護衛者』でも入れる者は限られる。

俺は認められている一人だ。

「一刀、あなたに任務を与えます」

「え？」

「え？ではありません」

「すいません。姫が任務を与えるのは珍しいことなので……」

姫が任務を与えるのは本当に珍しい。

俺もここに入って五年だが

姫からの直接任務は一つしか

任務を与えられていない。
二十三年のベテランも三つしかないそうだ。
それ位珍しい。

「そうですね。これは私が直接与える最後の任務です」

「え？」

どう言うことだ？
まさか……首！？

「首ではありませんよ」

「良かった……」

と言つか姫は心を読めるのかよ……

「ある意味では首と繋がりますが……」

「え？」

マジかよ……

「また会えますから」

良かった……

「では、任務を与えます」

「はっ！」

俺は身構えた。

俺がこの組織で与えられる

姫からの最後の任務俺はその任務を

全力で遂行する心構えをする為に……

「あなたにはある世界に飛んでもらいます」

「え？」

「では、行つてらっしゃい」

姫がそう言った瞬間俺が居た床は歪み始める。

「ちょ！これは！」

これは姫が別の世界に飛ぶ時に使う

術じゃないか！

これに逆らえる奴は居ない。

「あ、そうだ！あっちでは簡単に人の

名前を呼んではいけませんよ？

首を刎ねられますから♪」

「はい！？」

「あっちでは真名の習慣があるのです。

私達の真名のように魂を縛ることはありませんが

その人の生きざまを示す物ですから。

これはあっちで必要な物と餞別です」

「多っ！って、うわーーーー！」

「一刀、お気をつけて……」

俺はそこで意識を手放した……

俺が見たのは姫の悲しそうな顔だった……

そんな顔をするなら俺を送らなければ良いのに……

一話 始まり（後書き）

どうでしたでしょうか。

コメントを頂けると光栄です。

一刀君の正妻について何か意見が
ございましたら意見をください。

では、また次回。

二話 盾と王達の出会（前篇）（前書き）

こんにちわ

さて、今回でやっと一刀と三国の

王達が会います。

正妻についてですが

華琳か愛紗か恋か蓮華の誰かに

しようかと思っています。他の誰でも良いですが

コメントお願いします。

では、始まり

二話 盾と王達の出会（前篇）

一刀side

「いてて……」

あゝもう！

姫もひどいな！

何であんなことしたんだよ！

それに何だよこの荷物！

多すぎだろ！一体何が入ってるんだ！？
って言うかこの長いのは……

「げえっ！『記憶刀』と『鬼神弓』！

それに『鬼神槍』じゃないか！なんで

こんな物……あれ？このリュックやけに重い

何が……おいおい！『鬼神手甲』って

姫は俺に戦争を起こさせたいのかよ！」

全部俺が本気を出す時に使う武器じゃないか！

姫は一体何を考えてるんだ……

それにまだリュックがあるな

これも重い……俺はこれ以上武器なんて持って
無いぞ？

これは一体……開けてみるか……

……！これは……！

「……姫、あんたは俺に何をさせたいんですか？
ん？手紙？」

『一刀へ。』

あなたは驚いているでしょう？

あなたにはこれからその世界で生活して

もらいます。たまに行きますので許してください（テヘッ）

それと、あなたが居る近くに街が見える筈です。』

俺はそこまで読んで周りを探す。

あつた……あそこに行けば良いのか？

『あなたはそこに行ってください。

荷物は全部持つて行くんですよ？

あなたの服もありますから。

それと、黒いリュックは餞別です。

まだ、開けないでください。』

何が入ってるんだよ……

『このリュックにもう一つ手紙が入って

いるので城の主に渡してください。

このリュックは街に城があるので

その城の主に渡してください』

城の主はこんなの見たら卒倒するんじゃないですか？

『後、城の主には私の性と名と

字を言えば一発OKです！

もしもの時は真名を言ってください。

私は城の主に真名を預けていますので。

では、お元気で』

「はーーーーっ!？」

真名を預けた!？何故!？

姫は一体何を考えて真名を預けたんだ!？

「今は考えてもしようがないか……」

取りあえずこんな物を持ってちやまず

真正面からは街に入らせてくれないだろうし……

忍び込むか…… ああー荷物が多いって大変なんだよ!」

俺は愚痴を言いながら街の方に歩いて行った。

華琳 side

「先程の流星はやはり……」

「そうなのでしょうね。」

秋蘭、春蘭行くわよ」

「「御意!」」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん行こ!」

「応なのだ!」

「御意!」

「楽しそうね行くわよ蓮華、明命、思春!」

「「「はい！」」」

街

街に出てきた私達は違和感を覚えた。

何故か落ち着かない……

いつもはこんなことは無いのに……

今日に限ってどうしたのだろう……

嫌なことが起きるような気がする……

「華琳様どうしたのですか？」

「いえ、何故か落ち着かなくてね」

「気分が悪いなら城に戻った方が良いでしょう？」

「いえ、平気よ。『盾』の運命を持つ者に会いもの」

「そうですね、ですが華琳様、気分が優れないようになりましたらすぐに城に御戻りください」

「ふふっ、心配してくれてありがとう秋蘭」

「いえ」

秋蘭はたまに見せる赤い顔が可愛い。

いつも冷静だから照れる顔は滅多に見せない。
そんなことを思っていると春蘭が止まる。

「どうしたの？春蘭」

「今殺気があったような……」

「そうなの？」

「私も感じました」

「秋蘭も？他の皆はどうかしら？」

皆首を縦に振る。だが、殺気は微弱らしい。

「城に戻った方が良さそうね……」

「ええ、そうしましょう。皆戻るぞ」

秋蘭がそう言った瞬間複数の男達が
私達の前に現れる。

「何だお前達は！？」

「三国の王達よ覚悟！」

「くっ！華琳様は後に！」

「ええっ！」

「孫策様は後ろに……やっぱり戦いますか……」

「当たり前でしょ？明命」

「はぁ……」

「桃香様！お下がりください！」

「うん！」

私達が下がると男達は襲い掛って来る。

「うおおおおおっ！」

「遅い！だらあああっ！」

グサッ！

「ぐはっ！」

「ふっ！」

ヒュンッ！

ザスッ！

「ぐはぁっ！」

「姉者、敵が多いぞ！」

「確かに！秋蘭の言う通りだ！こ奴等は一体どうやって集めたのだ！」

「そんなこと関係無いのだ！今はお姉ちゃん達を守るのだ！」

「鈴々の言う通りだぞ！愛紗！今は戦うのみ！」

「そうよ！今は楽しまないと……ねっ！」

ザクッ！

「ぐふっ！」

「でも、数の暴力はきついですよーっ！」

「文句を言つな、明命。今は戦うことに集中しろ」

「うっ……」

一刀side

「あれは……きつそうだな……見た感じ十対千つてところか……良くもまあ、あそこまで集まって展開出来たもんだ。でも……」

俺は鬼神弓を取りだし気を集めて
気の矢を創り

鬼神弓を番えて

「ここまでだ」

ヒュンッ！

ザスッ

良し！命中！

俺の存在に気がついたのか

黒い髪の女の子が俺に

質問を叫ぶ。

「誰だ！屋根の上に居るのは！」

「当然の疑問だろうけど今はめんどくさいから
後にくれよ！後で答えるから！」

俺は気を集め気の矢を創り

真上に構える。

「『鬼神の矢雨』」

ビュンッ！

そんな音がした後には気の矢の雨が男達に降り注ぐ。

「ぐはっ！」

「がっ！」

「ぐあぁっ！」

全ての男達に気の矢の雨が降り注いだのを見た俺は鬼神弓をしまい全部の荷物を持って屋根から降りて少女達に自己紹介した。

「俺は北郷一刀、あの城の主にちよつと用があつて来たんだ」

少女達は一瞬固まり口を開いて

「「「えーーーーーっ！」」」

「っ！何！？俺何かした！？」

「ご、ごめんなさい。あの城の主は私よ」

「……マジ？」

「ええ」

こんなに小さい子があんなに大きな城の主？マジかよ……この世界はどう言つ世界だよ……

「とりあえず、城に行きましょうか。
詳しい話は……」

「お待ちください！華琳様！こ奴が本当に北郷一刀か分かりません！」

俺、マジでこの世界で何かしたのかな……
でも、俺他の世界に来たのって初めてだし……
あ！そうだ！

「ちょっと待ってて！今俺の主から預かった
手紙を出すから……」

俺は赤いリュックから姫の手紙を探す。

「え〜っと、どこかなあ……あ！あつた！
はい！俺の主からの手紙だ！」

俺はそう言って姫からのその手紙を少女に渡す。

「これは……！あなたこの手紙は確かに本物？」

「ああ、なんならその手紙を書いた人の真名を
言おうか？俺知ってるし」

「なら、耳打ちしてみなさい」

俺は少女に近づいて耳打ちする。

「！確かにあの人の真名はそれよ。
でも、あの人は……」

「それについても詳しくは後で、それじゃあ駄目かな？」

「良いわ。春蘭、警戒を解きなさい。彼は本当に

北郷一刀よ」

「で、ですが……」

「春蘭」

「は！分かりました！」

すごいな……

あんな覇気は久しぶりに見たな……

「早く行くわよ」

「ああ」

俺は少女について行った。

しかし、姫と彼女の関係は一体何なんだ？

姫は一体昔に何をしたんだ？

姫は俺に何を隠しているんだ？

俺は一体この世界で何をすべきなんだ？

俺はそれをいつになったらそれを知ることが出来るんだ？

俺の頭の中にはそんな疑問が渦巻いていた……

二話 盾と王達の出会（前篇）（後書き）

アンケート

天下一品武道会で一刀と戦う相手を迷っています。

誰か戦わせたい人が居たら

コメントしてください。

よろしく願います。

三話 盾と王達との出会い（後編）（前書き）

こんにちわ

今回は娘が一刀に持たせたとんでもない物の

正体が明らかになります。

それと書き忘れていたのですが反董卓連合の後に仲間になる人達は『あること』がきっかけでもう仲間になっています。

では、始まり

三話 盾と王達との出会い（後編）

城の主に案内されて俺は今城の玉座に居る。

玉座に居るのはそれ以外にあの男達と戦っていた少女達とその仲間であるう少女達が居る。

城の主は玉座に座り俺を見ている。

こう言うのに慣れている俺は全く緊張しないが少女から発せられている覇気は尋常じゃない。

「北郷一刀、私に用があつたのでしょうか？
言いなさい」

「はっ！我が主人はあなた様にとある物を渡せと申しております！」

「それは何？」

「この中にあります」

「春蘭」

「御意！」

春蘭と呼ばれた少女が赤いリュックを持って行こうとするが……

「お、重い……！」

「え！？春蘭が重いと言うって何が入っているの！？」

そりゃ、重いだろうなだって……

「金の延べ棒が三百本も入ってれば重いよな……」

「……はぁ……っ!?」

俺が呟いた言葉を聞いた少女達は驚いた顔をしている。
そりゃ、そんなに金の延べ棒が入っているなんて信じられない
だろう。

「なら開けて見せましょう。どうぞ」

俺は開けてその場に居た少女達に見える
様にリュックを広げる。
リュックの中には眩しいまでに光っている
金の延べ棒が入っていた。

「……」

叫んだ次はびっくりし過ぎて開いた口が
開かなくなるか。
当たり前前の反応だな。

「これをどう使うかはあなたの采配しだいです。
御受け取りください」

「桃香、雪蓮」

「何かな？」

「何？」

「蜀と呉にこれを百本づつ与えるわ。そっじゃないと不公平ですものね」

「ありがとう、華琳」

「ありがとう、華琳ちゃん」

え？蜀？呉？まさか……

「あなた様は曹操様でございますか？」

「ええ、知らなかったの？」

「はい。我が主は気まぐれですので……」

えっと、確か姫は俺を別の世界に飛ばしたんだよな？

それで、曹操ってことは……

これパラレルワールドだよな？

姫も本当に意地悪だな……

「ところであなたはこれからどうするの？」

「実は信じてくださるか分かりませんが……」

とりあえず話してみよう。

信じないかもしれないけど……

「とんでも無い程規模が大きい話ね……」

俺はとりあえずではあるが俺がどうやってここに
来たのか。

俺が任務と言う形で追い出されたこと。

これからどうすれば良いのか分からないことを話した。

「我が主は何も私に話さずに私を飛ばしたので
私のすべきことは何なのか分からぬ状況
なのです」

「「「
……………」」」

「何ですか？その憐みの目は」

「「「
……………」」」

「やめてください。悲しくなります」

「「「
……………」」」

「お願いします！やめてください！」

「「「
……………」」」

「やめてー！俺を憐みの目で見ないでー！」

「「「（泣いてる顔が可愛い！）」「」「」

えぐつ、えぐつ、俺はどうすれば良いんだよー……

「こ、こほんっ！とりあえずあなたはここに居なさい。他に行く所が無いならここに居た方が良いでしょう？」

「良いのですか……？」

「え、ええ（可愛すぎるわ！この可愛さは反則よ！）」

「ありがとうございます！」

「ええ（言えない！手紙にあなたの面倒を見るように書いてあるなんて

言えない！）

では、部屋を用意させるわ。その前に自己紹介をしましょうか。

私の性は曹、名も曹、字は孟徳、真名は……」

「お待ちください」

「何かしら？」

「私は真名を明かせないのです」

俺がそう言った瞬間曹操の顔が陰しいものになる。

「何故かしら？」

「掟だからです」

「掟？」

「はい、先程主が私をこの世界に飛ばしたと申しましたよね？」

「ええ、それに何か関係が？」

「はい、そう言う力を持つ者の三戒の掟があるのです。一つ目に人を殺す為に使うな。

二つ目に人の心を壊すな。

そして、最後に自分の妻と従うべき者以外に真名を明かすな。以上の三つです」

「そう、分かったわ。掟ならば仕方無いわ。それ以外は？」

「言えます。私の性は北郷、名は一刀。字は持ち合わせておりません」

「あら、変わってるわね」

「ここからしたらそうなのでしょう。ですが私が居た世界ではそれが普通でしたので」

いきなり別の世界に飛ばされるなんて普通は思いませんしね……

「良いわ、私は一刀と呼びましょう。各々自己紹介をしなさい」

自己紹介の場面を書くとき長いので省略

「自己紹介も終わったわね。部屋の準備も終わったらしいからもう休みなさい」

「はい」

一刀の部屋

俺はその後侍女に連れられて自分の部屋の寝台に寝ころんだ。

「はあ……俺どうすれば良いんだろ？」

昨日から考えていた……

それでも、答えは出ない……

「今は出来る限りのことをするか……」

背伸びをしてみようがない。

今は出来ることを一つ一つ

やって行けば良い。

そう、思いながら俺は意識を手放した。

三話 盾と王達との出会い（後編）（後書き）

アンケート

姫や一刀が使う能力の名前を募集します。

二話連続でアンケートを取るの是不味いと思ったのですが

悩んで悩んで昼寝も出来ません……

私が昼寝を出来るようになる為に
よろしく願います。

能力は三戒に触れない限り、

そして、能力者の気がつきない限り何でも出来ます。

四話 天下一品武道会（前日）（前書き）

先程の変な文章を見た方は申し訳
ありませんでした……

実は先程妹に悪戯をされてしまい。

変な文章を投稿してしまったのです。

その文章で不快な思いをしてしまった

方々には深くお詫び申し上げます。

申し訳ございませんでした……

これからもう二度とあんなことが無いように
精進いたします。

では、始まりです。

四話 天下一品武道会（前日）

昨日は考えなかったがこの世界は
やはりおかしい。

俺の知っている王達全員が女性だった。

俺はこのおかしいな世界で何をすればいいんだ？
一体何をする為に飛ばされたんだ？
分からない……

「どうすれば良いんですか？ 姫……」

独り言を言っても何も変わらないことは分かってる。
それでも呟かずにはいられなかった……

「ははっ……俺は何を弱気になってるんだろうな……」

こんな時には姫達から貰った銭別でも
見てみるか……もしかしたら良い物が入ってる
かもしれない。

そう思いたいのは俺のささやかな希望だ。

そう思わなければやっていけない……

俺は黒いリュックを漁る。

その中には仲間の名前が書いてあった袋があった。
もちろん姫の名前が書いてある物もあった。

「姫からの銭別か……」

俺は姫の名前が書いてある袋を取って
中身を出してみる。

「玉？」

中に入っていたのは球だった。

「こんな玉どうしろって……ぐっ！？」

その玉を観察していたらいきなり頭が割れるような頭に激痛が走る。

「ぐおおおおおっ！？」

何なんだこれは！？

映像が流れてくる！

これは別の世界の俺？

蜀に落ちて劉備達を率いて

大陸を平和にした記憶。

次は呉に落ちて呉の為に尽くし

子供を授かった記憶。

そして、魏に落ちて曹操を

霸王にし、俺が消えた記憶。

姫はこのことを知っていた？

だから、俺をこの世界に飛ばしたのか？

……駄目だ、いくら考えても

答えは見つからない……

今は姫を信じるしかないか……

「北郷、失礼するぞ」

そう言って

「あ、はい。どうぞ」

「今すぐ玉座に行くぞ。詳しいことは玉座で話される」

「分かりました。すぐに行きます」

「……………」

ん？俺何か不味いこと言ったか？

「あの夏侯淵さん？」

「ああ、すまん。さあ、行こう」

「はい」

玉座

秋蘭に連れられて来た玉座には三国の王や武将それに、軍師が揃っていた。

「……………私何かしましたっけ？」

三国の武将からものすごい殺気というか闘気が……………

「北郷、今あなたに闘気を
当てている者はね、あなたのことを
認めていない者だったり、あなたと闘いたい
者達なのよ」

「つまりで闘えと？」

すると、今度は桃香が首を縦に振り
こう答えた。

「はい、でも今じゃありません。
明日、天下一品武道会と言う物があつて
そこで闘つて欲しいんです」

今度は雪蓮が悪戯な顔をして

「そこで良い成績を取らないと追い出されちゃうかもね」

マジかよ……

流石にそれは困るな……

「分かりました。出来る限りのことは
しましょう。何とか頑張ってみます」

つて言っただけど何とかなるのか
心配になつてきた……

「じゃあ、この話はこれで終わり。
明日に向けて各自準備をしなさい」

「「「御意!」」」

はぁ……しょうがない……

何とか頑張るって言ったんだ。

頑張ってみるか……

四話 天下一品武道会（前日）（後書き）

前書きであんなことを書いた人間が
書くことではありませんが

アンケートに答えてくれる人が少なく
資料が少なく困っています。

積極的にアンケートにご協力ください。
よろしく願います。

五話 天下一品武道会（一回戦目）（前書き）

こんにちわ

一回戦目の一刀の相手は

凧にしました。

何となくです。

ですが、やってみたかったです。

……冷やかな目で見ないでくださいね？

では、始まり

五話 天下一品武道会（一回戦目）

今日は天下一品武道会。

俺は今天下一品武道会が行われる会場の
準備室に居る。

俺の一回戦目の相手は凧。

凧の武器は手甲だから……鬼神手甲にするか！
俺は鬼神手甲をはめて準備終了！

「準備が整いましたので舞台にお上がりください」

「分かりました！」

タイミングばっちりだな。

よし！行くか！

『さあ、始まりました！天下一品武道会！

記念すべき一回戦第一仕合は

魏の警備隊隊長！楽文謙！』

「頑張ります！」

『それに対するは天から舞い降りた

この男！きゃー！かっこいい！

北郷一刀さん！』

「よろしく願います」

何かすごい殺気がするんだけど……

『死ねよあいつ………』

今俺の悪口聞こえた！

死ねって言われた！

死ねって！

『では、二人共（って言うか一刀さん）頑張ってください！』

「よろしくお願いします北郷殿」

「こちらこそ」

『何か仲良くやってますね！……』

まあ、良いでしょう。

では、位置について！』

冷静になれ……

『構え！』

邪心を捨てろ……

『始め！』

戦え！

ドオオオオオッ！

仕合の銅鑼が鳴った瞬間に動いたのは凧だった。
と、言うより俺は冷静になって凧の動きを
観察することにした。

「はっ！ふっ！はあっ！」

早い……

でも……今の俺よりは遅いな……
それに、凧はただ早いだけだ……

「さっきからかわしているだけです
どうしました!？」

「真面目にやっていますよ？」

「なら攻撃して来たらどうです!？」

「そうですね……では」

「な!？」

俺は凧が繰り出した拳を掴み
そのまま鳩尾に正拳突きをする。

「ぐっ！」

凧はそのまま気を失ってしまった。

「なるべく早く終わらせたかったので……」

これじゃ、鬼神手甲も要らなかつたような……
そんなことを考えるな！
尻に失礼だ！

「えっと、司会さん！これはどうなるんですか？」

『え、えっと、楽文謙さんが気絶したので
一刀さんの勝利になります！』

「ふう……」

いまいち喜べないな……
まあ、良いか……

蜀の観客では

「北郷さん強い！」

「強いとかそう言う次元ではありませんよ！
あれは……次元が違います」

「愛紗の言う通りなのだ！
鈴々でも攻撃を当てられるか心配に
なる位強いのだ！」

「……恋でも勝てないかも」

「恋殿は最強なのです！」

「……でも、北郷も強い」

「うう、それは認めます」

と、一刀の強さに驚いていた。

呉の観客席では

「あの子強いわね」

「全くじゃ」

「全くです」

「全くです!」

「全くだ」

「全くですね」

「全くね」

「全くです」

「全くですね」

一同が同じ反応をしていた。

魏では

「あの男一体どう言う鍛練をしたらあんな強さになるのかしら」

「あ、あんな奴一瞬で倒してみせます！」

「ああ、強がっている姉者も可愛いなあ……」

「ふふつ、もしあの男に勝ったらご褒美をあげるわよ」

「絶対勝ちます！」

百合百合しい雰囲気が漂っていた。

一刀side

あそこまで圧倒的に勝てるなんてな……

凧もあそこで気で防御してた筈だ。

なのに一瞬……

俺はそこまで強くなったのか？

「ふつ、俺は盾。

守る為に強くないといけない……」

もう、昔のように皆の背中を見て
俺では無いんだ……

五話 天下一品武道会（一回戦目）（後書き）

二回戦の相手を迷っています。
コメントよろしくお願いします。

六話 天下一品武道会（二回戦目）（前書き）

こんにちわ

二回戦目は孫権さんが相手です！

六回戦目が決勝です！

（勿論呂布が決勝）

では、始まり

六話 天下一品武道会（二回戦目）

俺は今、準備する為に準備室に居た。

「えーっと、今回の相手は蓮華だから記憶刀で行くか」

「準備が整いましたので舞台にお上がりください」

「分かりました！」

すごいタイミングだな。

『さーて、一回戦目が終わり二回戦目に移ります！一試合目は孫呉の巨尻！孫仲謀！』

「私は巨尻では無い！」

『はい、流しませう！それに対するのはちいの

恋人！北郷一刀さんです！』

いつの間に俺、地和の恋人になったんだ？

「恋人になった覚えはありませんよー？」

『やだ、一刀。あんなに激しくしてたのに？』

「ちょ！誤解されること言わないでくれ！」

思わず素が出たじゃないか！

『思った通り敬語より素の方がかつこいい！
素で話して〜！』

「こほんっ！早く始めてください！」

全く、地和め……！

おっと！落ち着け俺……

『可愛いなあ〜！

では、位置について！』

冷静になれ……

『構え！』

邪心を捨てろ……

『始め！』

戦え！

ドオオオオオオオッ！

銅鑼が鳴っても蓮華は突っ込んで
来なかった。

どうやら様子を見ているらしい。

「その判断は正しいですよ。
突っ込んできたところで私に勝てる
なんてことは絶対にありませんから」

「……………」

黙って様子見か……

そんなことをしても無駄だけどな……
まあ、一回戦目みたいに早く終わらせると
ちよつと詰まらないから……

「少し、昔話をしましょうか……………」

「？」

「私の家は道場で師範は私の祖父でした。
私は祖父の鍛練を受けて刀、弓、格闘
その三つを極めました。
そんな、ある時刀での仕合で私は相手を殺してしまったんです」

「！」

「私は加減を間違えたんですよ…………
強くなり過ぎて祖父さえも超えてしまつて
私の横には誰も居なかつたんです…………
そんな、ある時私の下にある一人の
少女が来たんです。

彼女はこう言いました。

『私と一緒に行きましょう』と

私は条件を出しました。

『私と同じくらいの強い者が欲しい』と

そう言ったら彼女は私と戦いたいと言いました。

私は戦いました。

結果は負けでした。

私に目標が出来たんです。

そして、今は私はその少女より強くなりました。

でも、今ならそれで良いって思えるんですよ。

だって……

誰にも負けなければ私の大切な者は誰にも

奪われないでしょ？」

「……………」

「長い話を聞いて頂きありがとうございました。
安心してください。

絶対に殺しはしませんから」

俺は記憶刀を構える。

それと同時に蓮華も構える。

「行くわよ!」

蓮華はそう言って突っ込んできた。

そこら辺の奴等よりは早い。

「はあああつ!」

俺は蓮華の剣を右に避ける。

だが、蓮華は振り降ろす途中で

剣閃を曲げた。

「っ!？」

ガキンッ!

俺は咄嗟に記憶刀で防御する。

「すごいですね。剣閃を途中で曲げるなんて
並みの人間には出来ませんよ」

「……今の」

!?まさか……

「見たんですか？」

「今のはあなたの記憶？」

「ええ、これは記憶刀と言います。
私が自分の罪を忘れないように自分で
鍛えた物です」

「……あなたと私が愛し合っていたり
敵対する映像が見えたけど……」

「そこまで見たのか……
今度教えるよ。
今は戦うのみだ」

「良いだろう。行くぞ！」

「残念だけでもう終わらせるよ」

「え？」

「ふっ！」

俺は足に力を入れ

ビュンッ！

次の瞬間には蓮華の後ろに居た。

「なっ！？」

そのまま蓮華の首に手刀を入れる。

バシッ！

そして、蓮華が倒れそうになったのを
そのまま支える。

「ふっ……司会さん！」

『そ、孫仲謀さんが気絶したので
一刀さんの勝ちです！』

順調に勝ってるな

さて、蓮華に話すことを考えておくか……

六話 天下一品武道会（二回戦目）（後書き）

蓮華、思い出しましたね

さて、三回戦目の相手を募集します！

よろしくお願いします！

七話 蓮華との会話

蓮華の部屋

俺は蓮華と話をする為に蓮華の部屋に来ていた。

「お話をする機会を頂きありがとうございます。
孫権殿」

「くすくすつ。あなたが敬語で話していると
似合わないわね」

「え？」

「さっき、貂蝉と名乗る怪しい筋肉だるまが来て
あなたに関する記憶を私に見せてくれたのよ」

筋肉だるまつて……

まあ、良いか実際筋肉だるまだし。

「今は孫権殿と呼んだ方が良いですか？
それとも……」

蓮華って呼んで良い？」

俺がそう言つと蓮華は顔を赤くして

「分かってるくせに……」

俺に抱きついてきた。

そして、俺は蓮華を抱きしめた。

「蓮華、愛してる……」

「私も……」

そして、ゆつくりと互いの唇を近付けて……

「蓮華、一刀がここに……」

やっぱり邪魔が入るのな……

（当たり前だよ！あはははっ！）

誰だよ！

「蓮華！何を抜け駆けをしてるのかしら？」

目がヤバイ！

何とかしないと！

「お待ちください！孫策殿！

私が孫権殿に自分の思いを打ち明けて

孫権殿は私の思いを受け止めてくださったのです！」

嘘は言って無い！

ただ重要な部分を省いただけ！

あゝでも、蓮華が斬られなくても

俺が絶対斬られるな……
王族に手を出したからな
短い人生だったな……
だが、雪蓮の反応は俺の予想とは
違った。

「あははははっ！一刀が敬語で話してると
すごい違和感がある！」

「えっと、孫策殿？」

「一刀、真名で呼んでも良いのよ？
『違う世界みたいに』ね」

「はい！？」

「さっき、貂蝉って名乗る筋肉だるまが……」

「また貂蝉か！まさか、三国の王や将全員に
記憶を見せるって言って無かった！？」

「い、言っただけ……」

「どんな世界の記憶を見せられた！？」

「全部……」

あの筋肉だるまめ！

「ごめん！少し用が出来た！

また後で！」

もし、華琳達に別の世界の記憶を見せられたら
とんでも無いことになる！

最悪、俺の首が飛ぶ！

だって、三国の王や将に全員手を出してるんだ！

殺されてもおかしくないぞ！

もし、あの筋肉たるまが別の世界の記憶を

華琳達に見せたら肉たるまから肉塊に変えてやる！

そんなことを思いながら蓮華の部屋を飛び出した俺であった。

余談だが俺が肉たるまを見つけたのは肉たるまが華琳達に

別の世界の記憶を見せた後だった……

そして、華琳達に蹴られたり殴られたりしたのは言うまでも無い……

…

七話 蓮華との会話（後書き）

展開が少し早いと思ったのですが
やりたかったんです。

……冷やかな目で見ないでください……
では、また次回。

八話 天下一品武道会（三回戦目）（前書き）

こんにちわ！

皆さん、実は謝ることがあります。

実がこうして『真・恋姫？無双』の小説を

書いているのは従兄からソフトを借りて書いているのですが
従兄から返却要求が出ているんです。

パソコンで注文してもいいのですがパソコンを直したのでお金が……
なので原作を元に行っている

『三人の天の御遣い』を打ち切らないといけない
かもしれません……

申し訳ありません！

出来る限りのことを尽くして打ち切りにならない
様に頑張ります！

しばらく『希望と絶望を持つ御遣い』の方を
書きます。

では、始まり！

八話 天下一品武道会（三回戦目）

どうもー！

毎度おなじみの準備室からお送りしていきまーす！
今回の対戦相手は張翼徳さんです！

「んー今回は鈴々だから鬼神槍で良いかな？」

ま、本音を言つと何でも良いんだけど……

「準備が整いましたので舞台にお上がりください」

お！始めて考えてる最中に呼ばれた！
ま、良いか。

「分かりました！」

『さーて！休憩時間も終わり三回戦目です！
三回戦目一仕合目はちっちゃいけど力強い！
張翼徳！』

「頑張るのだ！」

ちっちゃいって言われたのに反応しないのか？

『対するはここまで余裕で勝ち続けて来た一刀！』

遂には一刀だけになったか……

「お兄ちゃんと戦うなんて思って無かったのだ」

「張飛さんも貂蟬さんに？」

「そうなのだ！って何で敬語で話してるのだ？」

「癖です」

「直すのだ」

「無理です」

「むむむ……」

何がむむむだ……

すると鈴々は何か思いついたような顔をして
丈八陀矛を振り回し

「なら、鈴々が勝ったら敬語を直すのだ！」

笑顔でそう言った。

俺は鈴々らしいなと思いながら
鬼神槍を構える。

「良いでしょう」

『おっと！？やる気満々ですね〜！
では、位置に着いて！』

冷静になれ……

『構え!』

邪心を捨てろ……

『始め!』

戦え!

ドオオオオッ!

銅鑼が鳴った瞬間鈴々は突っ込んできた。
ま、鈴々が考えながら戦をするなんて
あり得ないか……

「うりやりやーっ!」

ガンッ! ガキンッ! ガンッ!

「昔より強くなりました?」

「鈴々は日々強くなるのだ!」

「ははっ、張飛さんが言うとな本当に聞こえます……ねっ!」

俺は身体を回転させて鬼神槍を薙ぎ払う。

「にやっ!?!」

鈴々は後に飛びそれを避ける。

流石鈴々だよなあ……

『あれ』をやるか……

「次はこちらからです」

俺は鈴々に向かって走りだす。

「はっ！ふっ！たあっ！」

「うりゃあっ！にやっ！にやっ！」

ガキンッ！ガンッ！ガンッ！

「うにゃ？」

「どうかしました？」

「何でも無いのだ！」

気付いたか？

もう良いかな？

俺は後に飛ぶ。

「何をしてるのだ？」

「教えますよ。終わってからね」

「っ！」

鈴々は真面目な顔をして丈八陀矛を構える。

「では、行きます」

俺は鈴々に向かって走る。

わざと手を出しやすい速度で……

「遅いのだ！おりゃー！」

そして、鈴々の槍が来た瞬間

俺は右に避けて鈴々の懐に入り

鈴々の首に鬼神槍をつきつける。

『一刀の勝ち！』

「ふう……」

俺は鈴々から離れる。

「お兄ちゃん、離れた時何をしたのだ？」

「ああ、あれは張飛さんの丈八陀矛の長さを測ったんですよ」

「測った？」

「ええ、突っ込んだ時に長さが分かっていれば
反応しやすいでしょ？」

「分かったのだ！」

……本当に分かってんのか？

「でも……」

「何ですか？」

鈴々は悲しそうな顔をして

「お兄ちゃんの槍から悲しい感じが流れて来たのだ……」

「！」

「お兄ちゃんは……」

「では、私はこれで！」

あれ以上言われたら俺は……

何をするか分からない……

そして、俺は逃げるように舞台から去った……

八話 天下一品武道会（三回戦目）（後書き）

前書きに書いた通り『三人の天の御遣い』は打ち切りになるかもしれませんが。

打ち切りにならない様に努力している間は『希望と絶望を持つ御遣い』を

書きます。

もし、打ち切りになったら原作完全無視の物を書きます。
では、また次回。

九話 天下一品武道会（四回戦目）（前書き）

こんにちわ

今回の相手は孫策さんです！

さて、一刀君は勝てるのか！？

では、始まり

九話 天下一品武道会（四回戦目）

「まさか、鈴々に見抜かれるとはな……」

でも、俺はいくら悲しくても前に進まないといけないんだ……

「さて、今回は雪蓮だから記憶刀で良いか」

「準備が整いましたので舞台にお上がりください」

もしかして俺が準備してるところ覗かれてる？

……何でもいいか。

「分かりました！」

今は雪蓮と戦うことを集中するか……

『さーて！四回戦目！

ついにこの天下一品武道会も

終盤に差し掛かりました！

四回戦目一試合目は戦大好き孫伯符！』

「ふふっ、楽しみだな」

怖……

鳥肌が止まらねえ……

『対するはとっても強い！

北郷一刀!』

「頑張ります」

「ふふっ、まさか一刀と戦うなんてね」

「私も思っていないませんでしたよ」

「本当に敬語だと違和感あるわよ。
いつまでやってる気？」

「いつまでもです。」

でも、あなたが私に勝てたら考えましょう」

「本当？」

「ええ」

「なら……」

やば……

殺気が半端無いな……

「さっさと勝ってその敬語をやめさせるわ」

「ははっ、怖いなあ……」

『軽く殺気が漂っていますが
お互いに殺さないでくださいね
では、位置に着いて!』

冷静になれ……

『構え!』

邪心を捨てろ……

『始め!』

戦え!

ドオオオオオッン!

銅鑼が鳴つても雪蓮は攻めてこない。
たまには俺から攻めてみるか……
俺は雪蓮に向かって走る。
だが、雪蓮は慌てずに構えている。
まずは様子見だ。

「はっ!」

ガキンッ!

「くっ!」

「この程度じゃ駄目ですか……
本気になったらどうですか?」

「私は本気……よっ!」

「うわつと！危ない危ない……」

「それでもまだ本気ではないと？」

「ええ、まだでしょう？」

「この程度が本気なら拍子抜けですよ」

「へえ、言うようになったじゃない。
本当に変わったわね」

「ええ、私は別の世界の私より強くなったんですよ。
……守るためにね。
その強さを少し見せましょう」

俺は体中にある闘気を出す。

「っ！」

「これが私が本気になった時の闘気です」

「全然違うわね……」

別の世界のあなたは相手を圧倒したり
しなかった。

でも、あなたは違う……」

「ふっ、そうですね。
自覚しています。

ですが、私は『北郷一刀』ですよ」

「そう……」

なら、別の世界のあなたの
様にしてあげるわ」

「遠慮しますね」

あんな非力な奴になるなんて……

「そう？」

でも、この仕合では勝たせてもらっわ」

「そうですか。」

では、行きます」

「私も行くわよ」

俺達は互いを見て武器を構える。
そして、お互いに向かって走る。
少しづつ距離が狭まり互いの
武器が届く距離になり武器を振る。
そして……

『一刀の勝ち！』

「ふう……」

俺の刀は雪蓮の首の寸前に

雪蓮の剣は中途半端な位置で止まっていた。

「強いわね……」

「言っただしょう？」

「それに、悲しみも強い……」

「……………」

「一刀、あなたに何があったの？」

「では、私はこれで……………」

「一刀！」

俺は雪蓮の声を無視して逃げるように準備室に戻った。

十話 天下一品武道会（五回戦目）（前書き）

こんにちわ

今回は準決勝では関羽さんです！

……って言いたかったんですが

関羽さんになると蜀三回（決勝戦は呂布なので）、呉二回、魏一回になるので

今回は張遼さんにします。

では、始まり

十話 天下一品武道会（五回戦目）

「……何で雪蓮はこの『俺』より
別世界の『俺』の方が良いんだ？」

別の世界の『俺』の様にしてやるってことは
そっちの方が良いってことだ……

「あんな非力な奴のどこが良いんだ……」

そんなことを考えていると

『一刀様』

そんな声がどこからか聞こえる。

「鬼神槍か？」

『はい』

「何だ？」

『次の仕合は張遼とのこと。
私をお使いください』

武器に心配させたか……
俺もまだまだだな……

「分かった。」

頼むぞ」

『御意』

「準備が整いましたので舞台にお上がりください」

今は戦うことだけ考え無いと負けるか……

「分かりました！

行くぞ、鬼神槍」

『はっ！』

『さうて！五回戦目！

あともう少しでこの天下一品武道会も
終わり！第一仕合！神速と言われた
張文遠！』

「絶対勝つで！」

あれ？地和が悪口言って無い……

『対するは最早説明不要！
北郷一刀！』

「一刀」

「何でしょう？」

「あんた、悲しい目をするようになったな」

「ははっ、進んできた道がそんな道ですから。

でも、私はどんなことがあっても進まないといけないんですよ。
強くなつて守りたいから……

別の世界の『私』の様な非力な奴にはなりたく無いので」

「そうかいな……

でも、別の世界の『あんた』も良いところあつたわ。

その良さを分かん限りあんたは別の世界の『あんた』に
負けたままや」

「そうですか。

でも、私は別の世界の『私』を認めませんよ」

「認めさせるわ……」

『両者やる気十分！

頑張ってください！

では位置に着いて！』

冷静になれ……

『構え！』

邪心を捨てろ……

『始め！』

戦え！

ドオオオオオッ！

銅鑼が鳴り霞が俺に向かって走って来る。
神速の霞に対して受けるのは危険だな。
そんなことを思い俺も霞に向かって走る。

「はあっ！」

「おりゃあっ！」

ガキンッ！

「別の世界のあんたは優しかった！
それに前を見てた！

今のあんた何やねん！
前を見て無いや無いか！」

「見てますよ。

私は強くなつて皆を守りたいんです」

「その先に何があるんや！
何も無い！

でも別の世界のあんたは先に何があるかちゃんと
分かっちゃた！

平和があるって分かっちゃたんや！」

「その平和を創る為に自分で剣を取りましたか？
ただ見てただけでしょう？

軍師なら良いですよ。

軍師は勝利の為の策を考えるんですから。

でも、あいつは遠くで見てただけです。
真に平和を願うなら自分で手を汚し自分で歩かなければ
いけないんですよ」

「あいつはちゃんと責任を取ってたんや！
それに、兵の死を悲しんでた！

一人一人の死を！
そんなこと出来る人間は少ないんや！」

「責任を取っても仕方ない時だってあります。
兵の死を悲しんだところで兵は帰ってきません。
そこら辺が分かって無いんですよ。
悲しむ暇があつたら前に進まないといけないんです」

「……本当に変わったんやなあんだ」

「現実を見ただけです。」

あの現実さえ見なければ私はあなたの言う通りの
男がただ強くなっただけの男だったでしょうね」

「何があつたんや？」

「さあ？教えませんよ」

あの事は皆には悲し過ぎるから……
記憶刀に触れてもあの事を見れるのは
俺だけになつてから記憶刀に触れても
問題無いから記憶刀も使つてる。

「あんたに勝つたら教えてくれるんか？」

「考えましょう」

「その敬語もやめてもらって」

「もしかして三国の目標になってます？」

「当たり前」

目標小さいなあ……

「じゃ、行くで」

霞は俺から距離をとるために後へ跳ぶ。

「どうぞ。」

来てください。

受けます」

霞は武器を構え俺に向かって走ってくる。

俺はただ武器を構えそれを受けるだけ……

簡単なことだ。

後は俺の実力次第……

少しずつ距離が狭まっていく。

そして、お互いの槍が届く距離になった時

ガキイイイイインッ……

そんな音を上げて槍が飛んだ。

俺は自分の手を見してみる。

…… あった。

俺の槍が。

飛んだのは霞の槍だった。

「私の勝ちですね。」

ありがとうございました。

では……」

「……………」

俺が帰る間霞はずっと無言だった。

まるで、俺のことを認めていないように……

十一話 かつての夢（前篇）（前書き）

こんにちわ

今回は一刀君の辛い記憶の夢です。

一刀君が何故現実的な性格になったかそれが語られます。
では、始まり

十一話 かつての夢（前篇）

夢の中に居る……

それは分かる……

今回は『あの記憶』の夢か……

良いだろう……

夢の物語の登場人物になってやろう……

これは俺が『直属護衛者』になってから三年が経ったある日のこと。

敵はあるヤクザ。

敵に対する会議が行われていた。

「敵は前回の奇襲で虫の息です。

頭を殺せば一気に倒れるかと」

「姫、私も一刀の意見に同意です。

少数の精鋭部隊で奇襲をかけ頭を暗殺しましょう」

「それが良いかもしれませんね。

では、今回の暗殺任務は一刀、龍人、豪人、
龍也……」

「それだけで十分でしょう。

なあ？」

「ああ。まず、『普通部隊』が奇襲をかけて俺達が頭を消し、『普通部隊』の援護をする」

「龍也の作戦で行きましょう。」

では、暗殺班は準備して行くぞ」

「「「おう」「」」」

「では、会議終了です。」

「刀は少し話をする為に私の部屋に」

「はははっ！姫！一刀を食べちゃ駄目ですよ！」

「分かっています！」

「刀」

「御意」

会議は終了し俺はそのまま姫の部屋に行った。

「姫、話と言うのは一体何ですか？」

「あなたも気付いているのでは？」

「……………」

「私から言いましょう。」

最近、敵に私達の動きが読まれています。前回の奇襲もあなたが勝手に行ったから成功したものの前回は危なかったです」

前回の奇襲はどこから奇襲をかけるか時間全て読まれていた。

そこで俺が姫の制止を無視して奇襲をかけ

勝利した。

「今回暗殺班に選んだのは裏切り者の可能性がある者達と処罰をする為の俺ってことですか？」

「……すいません」

「良いですよ。
やります。

話はそれだけですな。
行ってきます」

「行つてらっしゃい……」

俺が部屋から出る時姫を見た時姫は泣いていた……
罪悪感に苛まれながら……

敵アジト前

「さて、そろそろかな……」

ドゴオオオオオオッ！

「よし！暗殺班！行くぞ！」

『龍也了解！』

『龍人了解！』

「豪人了か……な！？何故お前が！？
ぐあっ！？」

「豪人！？どうした！？」

『一刀！龍人！豪人の確認は俺がやる！
早く行け！』

「頼む！」

俺は敵の頭に向かって走った。
豪人の無事を祈りながら……

敵頭の部屋の前

「ここか……」

ここは豪人が居た所からの方が近かったな……

「今は敵を倒すのみか……」

俺はドアに手をかける……

ビュンツ！

「なっ！？」

手をかけようとしたがナイフが飛んできて
俺はそれをかわした。

「お前は！」

そこに居たのは予想外の人物だった……

十一話 かつての夢（前篇）（後書き）

いや〜

一刀の過去を書こうって思ったんですけど

一刀の仲間の紹介を忘れてましたね〜

と言うことでここで今回出てきた一刀の仲間を書きましょう。

龍人

豪人の兄

一刀より二年先輩。

性格は基本的に馴れ馴れしい。

武器は銃とナイフ。

豪人

性格は冷静。

優しく無いと言う訳ではない。

武器と言われる物なら何でも。

一刀に槍を教えた人物。

龍也

龍人と同じく馴れ馴れしい性格。

武器はナイフ。

組織内でナイフの腕前は一番だが

龍人と戦う光景が一刀によって

しばしば目撃されている。

以上です。

では、また次回。

十二話 かつての夢（中編）

「何でお前がここに居るんだ？

……龍也」

「お前なら分かっていると思うんだけどよ
わからねえか？」

「豪人はどうした！？」

「さあな。

生きてるかもしれないし
死んでるかもしれない。

お前がやるべきなのは裏切り者の始末だろ？」

こいつに感情的になって襲いかかっても勝てる訳が無い。
ここは……

「もう、お前には逃げ道が無いぜ。

龍人もここに来る。

今なら冗談で済ませてやるよ」

「残念だけどな。

俺の前の仕事知ってるか？」

「傭兵だろ？

それが……」

待てよ？

姫が言つてたな……

『ここに来る者の中には前の仕事からまたその仕事につかないかとオファーが来ることがあるんです。

ですが、どれだけ有能になっっているか分からないので試験があるんですよ』

「気付いたようだな。

これは試験なんだ」

「お前……！」

傭兵になつて俺達と戦つても良いってか！」

「悪いけどその通りだ。

俺の『夢』を叶える為にもな」

「仲間を裏切つてでも叶えたい夢つてなんだよ！」

「いつか教えてやるさ。

行くぜ、一刀」

「っ！」

龍也は俺に向かってナイフを投げてくる。

「この程度俺に効くと思つてんのか！」

俺は記憶刀でそのナイフ全てを斬り落とす。

「ふっ」

待て、こいつの戦い方は！

「どかーん」

バアアアアアアッン！

「っ！間一髪だ……」

龍也のナイフにはたまに小型爆弾が仕込まれてるのを忘れてたぜ……

斬り落としてすぐに後に下がるか？

駄目だ！

下がってる間に隙が出来る。

なら……

一か八かだ！

俺は龍也に向かって走る。

「はあああああつ！」

「近づいてくるかこれじゃ爆発ナイフは使えないな」

龍也は普通のナイフを投げってくるがそんなのを斬り落とすのは走ってる最中でも容易い。

「なら……これだ！」

さっきまで数十本のナイフを投げていた龍也だがいきなり一本になり投げ方もまっすぐ直線ではなく山なりになった。

……まさか！

嫌な予感がして立ち止る。
すると

バアアアン！

そんな轟音と共に
俺が居た所に穴が開いた。

「ナイフ型拳銃」
かつこいいだろ？」

「……お前はナイフ屋か」

「ふっふっふ」
さあ、どうする？」

「……お前は俺をなめてるぜ。
俺が何で『直属護衛者』の中で
たった三年で歴代最強と呼ばれるようになったか。
それはな、俺がどんなことをしても勝つからだ。
と言つても一対一での闘いで卑怯な真似はしない。
そんなの実力じゃないからな。
どんなことをしても勝つてのはこう言うことだ！」

俺は龍也に向かって走る。

「おらあっ！」

龍也のナイフが飛んでくる。
俺は急所のみを防御しそれ以外は

無視する。

ザスザスザスツ！

身体中にナイフが刺さる音がする。
だが、それは無視だ。
今は龍也にのみ集中する！

「やっぱり勝てねえか……
退場させてもらうぜ。
じゃあな、死ぬなよ一刀」

ザシュツ！

そんな音と共に龍也は倒れた……

「はあ……はあ……」

流石に血を流し過ぎたか……

「一刀！」

「龍人が……」

「どうしたんだよ！
どうして龍也が倒れてるんだ！？」

「龍也が裏切り者だった……
襲って来たから殺した……」

「そんな……」

「落ち込んでる場合か……
任務を完遂するぞ」

「ああ」

俺は扉を開ける。

「これは！」

そこには信じられない光景が広がっていた。

十三話 かつての夢（後編）

敵の頭の部屋に入って俺達が見たのは椅子に縛られて気絶している敵の頭だった。

「こりゃ、一体どう言うことなんだ？」

「一刀、まずは仕事を……」

「そうだな」

俺と龍人は敵の頭に近づく俺は記憶刀を抜いて首を刎ね飛ばす。

ブシュウウウツ

そんな音がして鮮血が吹き出す。

そんな中敵の頭の胸ポケットに紙があるのが見えた。

「これは手紙か？」

俺はその手紙を取り出す。

そして中身を読む。

「！龍也……お前……」

「何を書いてあった？」

龍人はその手紙を覗きこもうとしたが

俺は胸ポケットにしまった。

「姫の所に行つてからだ。
行くぞ」

「あ、ああ」

そして、俺は姫の所に行く為に
部屋から出た。

本陣

部屋から出てから姫に連絡して
姫の所に来た時にはもう敵のアジトは
制圧されていた。

「一刀、只今帰還しました」

「龍人、只今帰還しました」

何故苗字を言わないかと言うとそう言うシステムだからだ。
普通は苗字を言うけどここで苗字を言ったら何も言わず
首を刎ねる。

うっかり言つても新人ならIDを言えば良いから新人はまだ良い。

「姫、裏切り者は龍也でした」

「そうでしたか……」

豪人は保護したと連絡が入りました」

良かった……

でも、俺は、この手紙を読まないといけないんだよね……

「姫、龍也が書いたと予想出来る手紙がありました」

「読んでください……」

「御意」

俺は手紙を広げて手紙を読む。

『今回、前回の奇襲で姫が俺と言う裏切り者の存在を気付いていることに俺も気付いていた。

そして、一刀が俺の始末の為に選ばれたことも。

まず、俺の可能性は低いが俺が一刀に勝った場合。

俺は一刀を殺さない。

いや、殺せないと言うべきか……

俺は前の職は傭兵だった。

傭兵はどんな人間さえも殺さなければならぬ。

でも、俺はお前達と長く居過ぎた。

感情移入しちまったんだ。

それに俺のテストは『直属護衛者』の誰かを倒すこと。

殺すことじゃない。

テストの条件にはあっている。

俺は傭兵になつたら外国の戦争が続いている地域に言って戦争を終わらせる。

姫の理想は素晴らしいからな。

もし、俺が負けて殺されても俺は恨まないぜ。
皆！頑張れよ！」

「以上が手紙の内容です」

「……………」

俺が手紙を読むと皆の間に重い空気が流れる。

「一刀、泣いても良いのですよ？」

「何でそんなこと言うんですか？」

「一刀が一番龍也と仲が良かったでは無いですか」

俺がこの組織に入った時に一番に話しかけてきたのが
龍也だった。

一番任務を共にしたのも龍也。

一番一緒に飯を食った回数が多いのも龍也だ。

一番の親友。

だから、姫は心配してくれているんだ。

でも……

「俺は泣いてやりませんよ。

あいつが勝手に裏切ったんです。

泣いてやる道理はありません」

「おい、一刀！」

龍人は立ち上がった俺に殴りかかろうとするが

「龍人やめなさい！」

姫が立ち上がり龍人を止める。

「姫！？ですが！」

「一刀、部屋に戻りなさい」

「御意」

そして俺は自分の部屋に戻った。
そして、心の中でこう呟いた。

姫、ありがとうございます、と

一刀の部屋

俺は自分の部屋で泣いていた。
ただただ泣いていた。

「う……う……う……龍也………
俺が何とかしたのに………！」
………！
………！

俺が泣いている最中、俺の部屋の扉が開き
姫が入って来た。

「一刀………」

「姫……俺はもつと強くなります！」

強くなって皆を守ります！」

俺があの時弱かったからあいつを殺すしかなかった！」

でも、あいつより強ければあいつを殺さなくても良かった！」

俺は強くなります！」

姫は俺を抱きしめて

「一刀、私も応援します。」

頑張つて強くなりってください。」

そして、皆を守ってください！」

「御意……！」

「んん……」

起きたか……」

今更あの時の夢を見るなんてな……

「俺は強くないといけないんだ……
皆を守る為に……」

次は飛將軍呂布との仕合。

これに勝てば俺は三国の武将の中でも最強だ。

そうならば皆を守る。

「やっぱり本気を出した方が良いよな……」

戦闘の時に着る服に着替え

俺は記憶刀を抜いて静かに語りかける。

「お前との付き合いももう五年だな……」

もしかしたら俺はここで皆を守る為に
力を求めたのかもな……」

もう、俺に迷いは無い。

この仕合で必ず勝つ！

勝って俺が最強だと言つことを証明して
皆を守る！

「準備が整いましたので舞台にお上がりください」

「分かりました！」

呂布に勝って俺が最強だと言つことを証明して
俺が皆を守る！

準備はもう出来ている！

さあ、行こう！

十四話 天下一品武道会（決勝戦）（前書き）

こんにちわ

今回でやつと天下一品武道会終了です。

果たして恋（呂布）は一刀の悲しみを受け止めることが出来るのか！？

今回はすごい展開になります。

今回の設定は別の小説でも使います。

では、始まり

十四話 天下一品武道会（決勝戦）

『ついに！ついに！ついに！
やってきましたー！』

天下一品武道会最終決戦！

その舞台で戦うのは

天下にその名を馳せる！

最強無敵！

飛將軍呂奉先！』

「……頑張る」

『その最強に対するは！

その身に纏う漆黒の衣は決意の表れか！？

各国の武將を余裕で倒して来た

北郷一刀！』

「私は負ける訳にはいきません」

「……服が違う」

「ああ、決勝戦なので変えてみました。
似合います？」

「……似合わない。
いつもの白い服が良い」

そんなにバツサリと……

「まあ、良いですけどね……」

『緊張感無いわね！

まあ、良いけど。

では、位置に着いて！』

冷静になれ……

『構え！』

邪心を捨てろ……

『始め！』

戦え！

ドオオオオオッ！

銅鑼がなり恋は俺に向かって走ってくる。
そして、方天画戟を振り降ろしてくる。

「……はっ！」

「くっ！」

流石飛將軍呂布だな。

今の心の乱れ切った俺だと

実力は同じか……

まさか、俺が観察してる余裕なんて無いな……
しょうがない、仕掛けるか……

「はあっ！」

ガキンッ！

「……っ！」

ガキンッ！

「流石呂布さんですね！」

勝てるかどうか不安になってきました！」

「……何で敬語で話す？」

「癖です……よっ！」

ガキンッ！

「……はあっ！」

「はあっ！」

ガンッ！

「……ご主人様は別の世界の『ご主人様』嫌い？」

「ええ、『彼』はただ兵が死んでいくのを悲しんだだけです。悲しむ暇があったら前に進んだ方が良くに決まっています」

「……別の世界の『ご主人様』は頑張ってた。」

それに恋達に希望をくれた。

恋は『ご主人様』に命をかけたいと思った」

「そうですか。」

でも、彼はただ戦場に行くあなた達の背中を見ていただけですよね？

『彼』は弱いと言う理由から戦場から逃げたんですよ。
弱いなら鍛えれば良かったんです。

『彼』はその努力もしませんでした。
だから、嫌いなんです」

語り合っている間も剣戟は続いていた。

お互いの主張。

恋は別の世界の『俺』を肯定し

俺は別の世界の『俺』を否定する。

剣を重ねることお互いの気持ちは強くなっていった。

そして、自分の気持ちを相手に認めさせる、

その思いが互いの剣を早くした。

そして、互いに離れた。

その決断は最早このままじゃ決着は着かないと言う判断だ。
次の一撃で決着は着く。

俺は別の世界の『俺』の否定や皆を守りたいと言う気持ち。

恋は別の世界の『俺』の肯定。

絶対に勝てる！

気持ちは負けない！

あんな奴を俺は認めない！

「……………」

「……………」

ビュウウウッ

静かに期を待つ俺達の間、風が吹き抜ける。
そして、俺と恋は走った。

お互いの主張を相手に認めさせる為に……

一歩づつ距離が近づいてくる。

お互いの刃が届くまであと五歩……

あと四歩……

あと三歩……

あと二歩……

あと一歩……

ガキイイイインッ！

飛んだのは……

俺の記憶刀だった……

「そんな……」

俺が負けた？

俺が……

「何で……」

「……ご主人様は強かった。
でも、恋はご主人様のことを思ってた。
だから、勝てた」

「俺の別の世界の『俺』を否定する思いが
お前の別の世界の『俺』を肯定する思いに
負けたと言うことか？」

「……（コクン）」

「そんな……」

何で……

あんな奴のどこが良い！？

どこまでも無力な奴が！

どこまでも甘い奴が！

何であいつを思える！？

何であいつを好きになれる!?

俺は認めない!

あんな奴をおおおっ!」

蜀の観客席

「皆行くよ!ご主人様のところに!」

「「「御意!」」」

呉の観客席

「一刀、あなたは弱くない!
行くぞ!一刀を救う為に!」

「「「はっ!」」」

魏の観客席

「どこまでも世話をやかせるわね!
行くわよ!」

「「「御意!」」」

舞台上

「何で俺はあいつを認めれば今までやってきたことが無駄になる！
あいつは誰も守れない！

だが、俺は皆を守るんだ！

あいつには出来ないことが出来る！

なのに俺よりもあいつがすごいだと！？

俺は認めない！

絶対に認めない！」

分かってる。

どんなどんなに別の世界の俺がすごかったか。

皆を安心させていたか……

でも、一つ許せないことがある。

それは、俺があの手を触った時に分かってしまった。

俺がどれだけ罪深いかってことが……

俺の所為で……！

俺の所為で『彼女達』は……！

「分かってるさ！

どんなに別の世界で俺がすごかったかって！

でも、認めたくないんだ！

だって俺は……『一刀（ご主人様）！』っ！」

その声が聞こえ声のする方を向くと

そこには三国の王や将達が立っていた。

勿論『彼女達』も立っていた。

「一刀！あなたは認めるべきよ！

別の世界のあなたの強さを！

何で認めないの！？

あなたは別の世界で呉を救ってくれたじゃない！」

「蜀の時も私達を救ってくれた！」

そして、華琳は舞台上上がり俺に近づき

俺を抱きしめた。

「一刀、別の世界のあなたは私を救ってくれた。

自分の身にどんなことがあっても私を霸王にしてくれたじゃない……
あなたはそんな人を弱いと言うの？」

「違う！違うんだ……！」

俺は……！俺は……！

俺の『魂』は！」

「え？」

華琳が首を傾けた瞬間

華琳の後には悲しい顔をした貂蝉が立っていた。

「そう言うことなのね」

「ああ、良く気付いたな貂蝉」

「どう言うことなの？」

「じしゅ……魏に落ちた世界で一刀君が消えた後

一刀君は元の世界に戻れなかったのよ」

「え？」

「俺はこの世界に居るべき存在。

だから、元の世界に帰ることを拒絶されたのさ。

姫は知ってたんだろうな。

……そうなんでしょう？

……姫」

貂蟬の後には俺がこの世界に飛ばされるまで守っていた
姫が立っていた。

「はい。

元の世界に帰ることを拒絶されたあなた魂は別の
世界『北郷一刀』に移りました。

あなたは忘れているでしょうがその時の衝撃で

あなたは他の二つの国に落ちたことも思い出しました。

その時にあなたは私に相談し

私はその記憶を封じある玉に封印しました。

それが、あなたに渡したあの玉です」

「簡単に言えば俺は魏に落ちた『北郷一刀』なんだ。
つまり、皆を泣かせた俺なんだよ……」

俺は俯いて続けた。

「あの世界の皆にはもう謝れない……
俺はあの世界に留まることを諦めた俺の『弱さ』を
憎んでいるんだ！」

「そう……」

とんだ偶然だったわねん」

「何？」

「あの世界はあなたと言う支えが無くなったことにより消滅したのよん。

でも、あの世界の彼女達の魂は残った。

そして……その先は言わなくても良いんじゃない？」

「まさか！

この世界の登場人物を作る為に使ったのか！？」

「正解よん♪」

じゃあ！

ここに居る華琳は……

「あの世界の華琳？」

「そうよん」

「っ！」

俺はもう我慢出来なかった。

俺は華琳に抱きついてしまった。

「一刀……」

「ごめん！

華琳！俺が諦めた所為で君を泣かせた！
俺が諦めなければ！」

「良いの……

良いのよ……

また、会えたのだから……

今は泣きなさい……」

その言葉を聞いて俺は
泣いた。

「うっ……うっ……うわああああっ！」

しばらく俺は華琳の胸で泣いて
落ち着いた時には俺は城の自分に連れていかれて
華琳はずっと傍に居てくれた。
優しい笑顔で……

十四話 天下一品武道会（決勝戦）（後書き）

どうでしたでしょうか？

ちよつと設定があれっぽかったけど

大丈夫ですよ？

コメント待ってます。

では、また次回。

十五話 愛する者達との和解

「……………」

「すう…………すう……………」

読者の皆さん。

俺は今疑問を持っています。

え？どんな疑問かって？

今俺の横には可愛い可愛い

霸王様が居るんだけど

その姿がね、

全裸な訳ですよ。

意味分かります？

俺はこの霸王様とそう言うことをした覚えが無い訳ですよ。

でも、同時に昨日の夜の記憶も無い訳ですよ。選択肢は三つです。

一 昨日寝ぼけて襲った。

二 霸王様が俺に酒を飲ませて襲った。

三 これは夢だ！

四 霸王様がただ俺の横で全裸で寝てるだけ

あなたの答えをコメントで……

って！じゃなくて！（コメントも欲しいけど！）

この状況をどうにかしないと！
春蘭か桂花が来たら殺される！

「華琳！起きて！華琳！」

起きないと俺が殺されるから！

「んん……か……違った……？あなた？どうしたの？」

ん？この霸王様は今何と？

「華琳、今何て？」

「？あなた？」

聞き間違いでは無いようだ。

「何でそう呼んでるんだ？」

「もう忘れたの？」

あんなに激しくして私のことを妻だつて
言ってくれたのに……」

何やってんだ！昨日の俺！

ここはご主人様って呼ばせろよ！

「一応言っておくけど？ご主人様？とは
呼ばないわよ」

心読みやがった……

「取りあえず俺のことは二人っきりの時に？あなた？って呼んでくれ
皆の前でやったら俺が殺される！
皆違う世界の記憶を持つてる訳だし」

「分かってるわよ。」

あなたが死んだら私も困るのだし。
その代り……」

「その代わり？」

俺がそう聞くと華琳はゆっくりと唇を近付けて……

「北郷！華琳様……を……」

「年中発情男！あんたなら華琳さ……」

おい！作者！

（何？）

邪魔を入れるな！

（頑張つて……♪）

作者……！！！！

「北郷オオオオオツ！」

「春蘭！あの変態男を斬り殺して！」

「珍しく気があつたな！
任せる！」

ヤバイ！

「来い！鬼神槍！」

俺がそう叫ぶと鬼神槍が来るシステムだ。
結構便利。

「な！？」

「鬼神槍は俺の半身も同然だ！
半身が呼べば来るのは当たり前だろ！」

「面白い！死ね！北郷！」

あれ？俺まさか春蘭に炎付けた？
やべ……フラグ立てた……

「しょうがないな！」

俺は戦闘態勢を取る。
別に倒さなくてもいい。
気絶さえさせれば……

と、思ったがその心配は偉大な霸王のおかげで消え去った。

「春蘭やめなさい！」

「ひいつ！」

俺が振り向いてみるとそこには姫にも劣らない覇気を
出す霸王が居た。

「私は一刀に襲われた訳では無いわ。
双方合意の上よ」

いや、俺覚えて無いし……

ごめんなさい！余計なことは言わないし
思いませんから睨まないでください！

「で？春蘭、桂花、私達の邪魔をしたからには何か
何かあるのでしょうか？」

別に威圧しながら言わなくても……
ごめんなさい！何も思いません！

「は、はい！」

劉備殿が『折角私達の知ってるご主人様が帰って来たから宴会しよ

』

と言ったので急遽宴会を開くことになりました！」

桃香、機嫌の悪い華琳に会えるからね。

頑張っ……

「ま、しょうがないわね。

分かったわ。

どこですか？」

「中庭だそうです！」

「分かったわ。

行くわよ春蘭、桂花、一刀」

「ああ」

「「はっ！」」

中庭

宴会が開かれている中庭に行くと最早そこは
カオスな庭になっていた。

「もっと酒持ってこいやー！」

神速の名前を待つ人が酒を持ってくるように命令（職権乱用）し

「そっだや！持ってきて来いにや！」

魏の大剣が猫と化し

「霞様！飲み過ぎです！」

魏の警備隊員が神速の名を待つ人の飲み過ぎを止めようとしたり

「もっと飲みまひょー！」

蜀の大徳が酒のに見過ぎで酔ったり

「桃香様！もう飲まないでください！」

蜀の美しい髪を持つ人が自分の主を止めたり

「わははは！策殿！酒が美味しいの！」

呉の老軀が主と酒をガブガブ飲んでいたり

「そうね！もつと飲むー！」

呉の王が酒に溺れたりとそんな光景だった。
その光景を一言で表すと

「なんつつカオスな光景……」

そう言うしかないだろう……

「華琳……」

華琳なら止めてくれると思って華琳を見て呼んでみたが……

「今日は宴会でしょう？無礼講よ」

「はぁ……俺が止めるしかないか……」

出来れば酒はあまり飲みたく無いんだが……

「あら？一刀では無いですか」
酒を飲むんですか？」

「ええ、何とかしないといけませんから」

「飲み過ぎて華琳さんを襲っではいけませんよ」

「はぁ……」

この人は……！
すると華琳は

「陛下！何を言っているのですか！」

「へ？」

「もう！華琳は……！
言っちゃいけませんよ……」

「あ、そう言えば……
姫の姓って劉で、名は協、字は伯和だったな。
って、俺何で忘れてたんだろう？」

姫の名前が皇帝と同じ名前だったことが偶然だったって
何で思ってたんだろうな？
ちよつと、俺の頭に自信が無くなったな……

「大丈夫ですよ」
一刀が私の名前に対して疑問を持たなかったのは私が
仙術でああなたの頭を操ってただけですから……」

「姫、あなたなにやってるんですか……」

因みに『直属護衛者』であなたの本当の姿を知ってる人ってどれ位ですか？」

「誰も知りませんよ」

「そうですか。」

でも、これからどうするんですか」

仮にも皇帝なんだから勝手なことは許されないだろう。

……今まで好き勝手にやってきたがこれからは許されないはずだ。

「しょうがないからまた皇帝にならないといけませんよね、
そうしたら三国を無理やりにも一つの国に纏めて

一刀をその頂点にして……」

「姫、その意図は？」

「意図？」

「ええ、『無理やりにも』ってあなた自身がそれに障害があるって分かってるってことですよ？
つまりあなたはそれなりに危険を冒すことになります。
あなたが危険を冒すと言うことはそれなりの意図がある筈です」

姫が危険を冒す時はそれなりの意図がある時だ。

姫は無意味に危険を冒さない。

そう言う人だ。

「勿論あります。」

これはあなたと貂蟬の所為ですが……」

姫はそう言って貂蟬を睨む。

「うう……」

華琳は変わった空気に耐えきれなくなったのだろう

「私は先に行っていますね」

華琳は皆の所に行ってしまった……

ありがとう華琳……

「三国の重臣たちがあなたに対する記憶を思いだしたと言うことはあなたに対する好意も思い出したと言う意味です。

つまりはあなたを巡って三国の戦が起こる可能性が出来たと言いう意味です。

それを防ぐ為にまず三国を一つにして三国の重臣達をあなたの臣下にする

必要があります」

「つまり俺をそれなりの地位にして無理やりにも皆を臣下にする？」

「はい、それと今回三国を一つにするのはもう一つ理由があります」

「何ですか？」

「貂蟬から聞きました。

あなたが来た時三国の王が暗殺者に狙われたそうですね」

「ええ、鬼神弓で撃った時に確信しました。
あれは実態がありません。

剣などで斬れば分かりませんが私の気で出来ている
矢は騙せません。
あれは仙術です」

「そうですか……」

「姫は狙われた時に三国の王達が近くに居れば守りやすいと？」

「ええ」

「分かりました。

姫はなるべく早く三国の統合をお願いします」

「はい」

そんな話をしていると

「かじゅとー！

早くのみゆのらー！」

「はあ……

では、私は酒に酔った猫を静かにさせますので
お願いします」

「ふふっ、分かりました」

この先に何が待っているようが俺が必ず皆を守る！

その為に俺は強くなったのだから……

拠点話 皆が集まった理由

俺は今軍議に参加しているんだがとんでもない状況な訳です。

その状況と言うのは……

俺の膝の上には可愛い霸王様こと

華琳が座っている。

「華琳、そろそろ時間よ」

呉の王雪蓮がそう言うのと華琳は不機嫌な顔をしたが渋々華琳は俺の膝の上から降りて代わりに雪蓮が俺の膝の上に乗った。

何故こうなったかと言うと説明するには軍議が始まった時まで遡らなければならない。軍議が始まり俺は自分の席に座ったんだが恋が俺の膝の上に座ったんだよ。

『恋何してるの?』

『……ご主人様の膝の上に座ってる』

『何で?』

『……座りたかった』

でもな、皆が俺のことを鬼神の如くの目で見たんだよ。だから、言ってしまったんだ。

『そんな目で見ないでくれ！

そんなに俺の膝の上に座りたいなら時間ごとに交代すれば良いだろ！』

そう言ったらその案が採用されて今に至る訳だ。

はあ、言わなければ良かった……

「それでは軍議は終了で良いわね」

やっと終わったか。

そう言えばずっと気になっていたことがあったな。

ちよつと聞いてみるか。

「なあ、この世界って反董卓連合が終わってすぐの世界だよな？」

「うん、そうだよ」

「何で白蓮や翠や蒲公英や紫苑や桔梗や孟獲達や麗羽達
が蜀に居て

美羽や七乃が呉に居て

風や凜が魏に居るんだ？

今上げた十一人＋αは反董卓連合からしばらく経ってから仲間になるはずだけど」

俺がそう聞くと桃香は困った顔をした。

「俺困るようなこと聞いたか？」

「うつん、別にそう言う訳じゃないよ。
えっと、夢を見たの」

「夢？」

すると今度は華琳が

「ええ、蜀が三国同盟をした世界で私達は
笑いながら誰かと話しているの。
楽しそうに、平和に……」

それで反董卓連合の後に三国の重鎮達で話したら
三国の重鎮達全員がその夢を見ていたのよ。
そしたら桃香が『夢が実現出来る様に頑張りましたよ』
って言って私達もそれに同意して今に至る訳」

「成程、それでまだ仲間になるはずではなかった
人達も自分達から仲間になった訳か」

「相変わらず察しが良いわね。
その察する能力を色恋でも使えないかしら？」

「え？どう言う意味？」

「「「はあ……」「」「」」

「どう言う意味だよーーーーー！」

後で街の人に聞いたんだが俺の叫び声は
街にまで届いていたらしい。
だって、皆溜め息つくんだもん……

拠点話 皆が集まった理由（後書き）

最近スランプ気味ですね……

何とかしないと……

と言う訳で何かご指摘があればよろしくお願いします。
では、また次回。

十六話 占い

俺は今街に来ている。

何もすることが無かったので街に来ているだけ。

本当は武将達による鍛練があっただが参加するのが面倒だった。

だから、街に来ている。

「何しようかな？」

一応街に来てはいるが何をするのか決めてる訳じゃないから少し困った。

「そこのお方」

「ん？」

どうしようかと悩んでいるとフードで顔を隠している怪しい人に声をかけられた。

「あなたじゃ」

「何の用ですか？」

一応仮面は付けておく。

仮面を外すと感情的になるからな。

「私は占い師。」

あなたを見た瞬間に興味が出たから

声をかけた」

「そうですか。
なら占つてみてくださいよ」

俺も昔から姫の不思議パワーを見てそう言うのは
慣れたからな。

それに俺も不思議パワーを使えるし
でたらめかつてのは分かる。

「よかるう。
しばしまたれよ……」

占い師はそう言うとか何か呪文を唱え始めた。
そしてその呪文が終わり俺をみてこう言った。

「あなたは自分の信じた道を行くが良い。
だが、例え自分が信じた道とはいえ愛した者を
悲しませるような道は取るでは無い」

この人は本物だ。
それに大物……
俺は感謝の礼として
砂金をいくらか入れてこう言った。

「ありがとうございます。
許子将さん」

顔は見えなかったが許子将が驚いた顔をしたのは
分かった。

「思い出したか」

「ええ、あなたも貂蟬や陛下と同じ類の方でしたか」

「まあの。」

この先はあたな自信じゃ。

平和を目指すことは皆を守ることになるう」

「礼の言葉も見つかりません」

俺がお辞儀をすると許子将は笑いながら
歩き去って行った。

「平和を目指すことは皆を守るか……」

なら目指してやろうじゃないか。
皆を守る為に！

十七話 侵入者！？（前篇）

「ん……もう朝かな？」

俺は寝台から身を起して着替える。

言っておくけど昨日は俺一人で寝たぞ？
本当だからな？

「誰に心で言い訳してんだよ俺は……」

そう言っただけ苦笑いしつつ着替えを終了させる。

「記憶刀も持ってた方が良さな？」

そう言いながら記憶刀をベルトに刺し込める。

「よし！完璧！」

そう言っただけ扉に向かおうとしたその時

バアアアアアアン！

そんな轟音と共に扉が倒れる。

俺は刀に手をかけるがすぐに警戒を解く
何故ならそこに居たのは……

「北郷！」

春蘭と秋蘭だったからだ。

「どうした？春蘭」

だが、春蘭の答えで俺は今度はまた緊張感を
最高にしなくてはならない状況に追いやられた。

「侵入者だ！」

「はあ！？」

今度は秋蘭が

「何でも怪しい行動をしていた男を女官が声をかけたところ
走って逃げたらしい」

「それだけか？

それだけなら……」

「それだけなら兵で取り押さえるだけで済むのだが
取り押さえる為に出した兵が全滅してな。

これは最早三国に対する挑戦だ。

それにより華琳様、雪蓮様、桃香様、

このお三方より將軍達で取り押さえるよう命令が出ている。
その男は今中庭に居るらしい」

「そんなにやる相手なのか？」

「顔を隠しているが呂布と同等らしい」

なら問題無いか……

「分かった。

行こう」

「「ああ」」

春蘭達の返事を聞いた俺は中庭へと走った。

だが、走っている最中俺は嫌な予感がしてたまらなかった……

中庭

中庭に着いて俺達が見たのはすさまじい光景だった。

恋、愛紗、鈴々、星、思春、明命、この六人が同時にいかかっても敵は倒れていないのだ。

しかも遊んでやがる。

あの六人を相手にしても遊ぶだけの余裕があるんだ。

俺はすぐに悟った。

俺が出るべきだと。

「恋！愛紗！鈴々！星！思春！明命！下がれ！

お前達が敵う相手じゃない！

お前達はそいつに遊ばれてる！」

俺がそう叫ぶと愛紗はこう叫んだ

「ご主人様！こやつは三国に対し挑戦状を叩きつけたのです！我等がここで下がる訳には……！」

もう！愛紗は！

「誰がそいつを逃がせと言った！
俺がやる！お前達は下がってろ！
巻き込む！」

俺はそう叫んで愛紗達の所まで跳び刀を抜いて
相手に斬りかかる。

ガキンッ！

だが、これをあいては防ぐ。
ここまでは誰にでも出来る芸当だ。
ならば……

俺は刀を振りながら左手に気を集める。

「はあっ！」

そして刀を薙ぎ払う敵はそれを避けるがそれも計算の内だ。
ある漫画でやってた技だけど借りよう。
薙ぎ払いの勢いで左手で敵を殴る。
気を集めた俺の拳は防げる物じゃない。

「くらえ！」

ドゴオオオオオオン！

「はあ！？」

だが俺の予想を覆して敵は受け止めていた。

身体には気を纏っている。

まさか……

「今の一瞬で気を纏って防御したのかよ!？」

そんな芸当俺の知ってる人間では姫とあいつしか……!

まさか!」

そんな訳が……!

だけどあり得る!

あいつならこんな滅茶苦茶芸当も納得できる!

この強さも納得出来る!

「まさか、親父か!？」

俺は目の前の男に聞いてみた。

すると、男は身に纏っていたマントを外した。

「良く気が付いたな。

息子よ」

そのマントの下にあった顔は間違いなく俺の親父だった。

十八話 侵入者！？（後編）

「親父何やってんだよ！」

「ってか、何でこんなところに……」

「えっと……前回のあらすじを言うと

朝になって起きたら春蘭と秋蘭が俺の部屋に来て

「侵入者だ！」って言われて走って来たら

敵が滅茶苦茶強くて俺が戦うことになったんだけど

敵は俺の親父だったと。

それが前回のあらすじだ。

「お前の嫁がどれだけの器が知りたくてな。

ついやってしまった」

「ああ！このいい加減なクソ親父が！」

「ついじゃねえよ！全く！」

俺が呆れていると愛紗が俺達に近寄り

おそろおそろ聞いてくる。

「あの……ご主人様のお父様なのですか？」

「いらつくことにな」

俺の答えを聞いた瞬間その場に居た武将達は固まってしまった。

「そう言えばここって儒学の教えだっけ？」

まあ、別にそんなに堅くならなくても良い様な気がするんだけどな

……親父だし

「皆、取りあえず玉座に行こう。

玉座で俺のクソ親父についての紹介をするから」

「クソ親父とは何だ！クソ親父とは！」

「うるさい、さっさと行くぞ」

ぶつぶつ文句を言う親父を無視してさっさと玉座に歩き出す。

玉座

玉座に着いた瞬間玉座に座っていた雪蓮、華琳、桃香が一斉に立ちあがった。

桃香は俺のに近づき俺の無事を確認する。

「ご主人様！大丈夫！？怪我はして無い！？」

「大丈夫だよ。

それより紹介したい人がいるんだ」

俺は親父を前に出した。

親父は俺の意を察したのか親父は自己紹介を始める。

「俺の名前は北郷 鷺。

「一刀の父親だ」

シーーーーーン……

しばしの沈黙。

そして、

「『えーーーーー！』」

少女達の叫び声。

その叫び声は城の中を響き渡り嘘か真か
街に居た赤子が叫び声を聞いて起きたらしい。

十八話 侵入者！？（後編）（後書き）

短いですが終了です。

父親の名前は別に『希望と絶望を持つ御遣い』の父親と同じ名前でも良いかなと思ひ驚にしました。では、また次回。

十九話 父親の歓迎の宴会

「あっはははは！」

一刀が羨ましいな〜！

こんなに美人な女性達に囲まれるとは！

だが、平等に全員愛せよ？

後から刺されるから！」

親父はそう言いながら俺の肩をばしばし叩いてくる。

「うつせえ……」

誰だよこのクソ親父をここに送ったの……
すると、桃香が酒を持って来た。

「お父様、お酒は足りていますか？」

「おお！足りてるぞ！気がきくお嬢さんだな一刀！」

桃香はそう言われて顔を赤くしている。

「一応言っておくけどここに居る誰かに手を出したら
一瞬で頭と身体がお別れするって思えよ」

「おお！怖い怖い」

俺以上に強いくせに分かりやすい芝居しやがって……

「なあ、一刀」

「何だよ？」

「どうやったらこんなにモテルんだ？」

はあ……このクソ親父は……

「誰か」

この酔っ払いを荒野に放り出してきて」

「ああ！すまん！許してくれ！」

「……」

いつも親父はこうだ。

能力は高いから尊敬は出来るけど
いつもいい加減に仕事をする。
だから、嫌いだ。

「で！？親父は何でここに来たんだ？」

「む？」

「『む？』じゃねえよ。

まさか、『前直属護衛者隊長』が子供の
妻の様子を見るだけで刀を持ってきた。
なんて言わないよな？」

「……」

俺がそう言つと親父は逃げようとする。

俺は親父の肩を掴んで逃げられないようにする。

「親父？まさか、その通りなのか？」

「ひいつ！」

「おゝやゝじゝ？楽に死んで地獄に行くのと
苦しんで天獄に行くのとはどっちが良い？」

「天国の国の字が間違っているぞ！」

「気のせいだろ？」

実際天国には行かせないけどな。

ふふふ……

「か、一刀！ところでお前は誰を妻にするんだ？」

話題を変えやがったな。

っていつか全員期待の目で俺を見てるし！
しょうがないな……

「全員だ」

「は？」

「だから、俺は全員妻にする」

「そ、そうか。」

頑張れよ？」

「ああ」

何で疑問形だったのと

全員の目がうつとりしてるのは放っておいて

「話を変えられたと思ったら大間違いだぞ？
何で刀を持って来た？」

「ひいつ！」

親父は全力で逃げる。

「逃がすか！待て！」

「待てと言われて待つ奴が居るか！」

「ふっ、その通りだな。

だが、俺には切り札がある！」

俺は三国の将達の方を向いて

「皆！親父を捕まえてくれたら
今夜たっぷりと可愛がるぞ！」

「「「何ですって！？」「」「」

全員の目が光り親父を追いかける。

「「「お父様！失礼します！」「」「」

「くっ！捕まってたまるか！俺は生きるんだ！」

その後結局親父は愛紗に捕まり俺がぼこぼこにして俺は愛紗にたつぷりと絞りとられあんなことを言ったことを後悔した。

二十話 始動

玉座の間

俺は今姫からの指示があったと言われて玉座の間に来ている。

「今回陛下から手紙が来て二日後朝廷に参内せよと指示が来たわ」

「本当に姫って献帝だったんだなあ……」

俺は親父にこっそりと言う。

「俺も知らなかったぞ？」

姫って色んな世界で色んなことをしてるから……」

「怖いな」

「怖いな」

俺達がコシヨコシヨ話をしていると愛紗がゆっくりと近づいてくる。
それを見て俺達は離れる。

それを見た桃香がフォローを入れる。

「じゃあ、その時のご主人様の同行者を決めようか」

ナイス！桃香！

俺はそのフォローに乗る。

「まず、三国の王達は来た方が良さだろう。

姫……陛下が何を話すか予想は出来ない。

何を話しても対応出来るようにね。

それと各国の筆頭軍師と護衛の為の武将一人づつ」

姫が何を話すのかは予想出来るけどな。

「蜀は桃香、雛里、恋だ」

「あわわっ、わ、私でしゅか!？」

噛んだな……予想通りの反応だ。

「最初は二人を連れて行こうかと思ったんだけど筆頭軍師が二人つてのはちょっとって思ってたさ。

駄目？」

そう言っと

「が、頑張りましゅ!」

そう言ってくれた。

でも、雛里、君は乗せられやすいよ……

あれ？華琳が得物を狙う目で雛里を見ているような……

気のせいだな。

そう思った方が良い。

「呉からは蓮華、亞莎、明命だ」

「はい!？」

はい、軍師と王様の予想通りの反応。

「一刀！どうして私なの！？」

「一刀様！何故ですか！？」

「冥琳は分かってくれているだろう？」

「ああ、そう言うことだな？」

「ああ」

冥琳まで分かって無かったらどうしようかと思った……

「えゝ冥琳ゝ何ゝ？」

ここに分かって無い王様一人か……
しょうがない、手掛かりはあげるか……

「時代は変わっていくのさ。
いつか蓮華は孫呉の王になり
亞莎は孫呉の筆頭軍師になる。
こう言うことを体験しておいた方が良い」

「……………」

だんまりですか……

まあ、しょうがないよな……

「魏は華琳、桂花、秋蘭だ」

「む？」

「北郷！華琳の護衛するのは私しか居ないだろう！」

「……………」

「黙るな！」

無理だ……

だって、相手は陛下だし春蘭が何をするのか
予想が出来ないんだもん……

「あんたが何をするのか予想が出来ないから厄介事を
置いておきたんでしょう」

ああ！桂花！言わないで欲しかったよ！

「北郷！貴様！死ね！」

「ちょ！華琳助けて！」

華琳の方をしてみる。

華琳は呆れた顔をしている。

「春蘭やめなさい」

「しかし！」

「春蘭」

「はっ！」

助かった……

「じゃあ、俺が言った通りの采配で良いかな？」

「蜀は問題無いよ」

「呉も問題無いわね」

そこは蓮華が答えるべきだと思うのは気のせいかい？雪蓮

「魏も問題は無いわね」

「よし、じゃあ、準備を始めようか」

「……はい（分かったわ）」「……」

俺は二日後にある参内にて姫から話されることを
予想しながら玉座の間を出た。

だが、俺はその予想が無駄だったと言うことをすぐに
知ることになる。

二十一話 朝廷参内（前篇）

俺は今玉座の間に居る。

勅使を待っているからだ。

玉座には各国の王が座り今か今かと緊張した面持ちで待っている。

俺は実は緊張していない。

元の世界では姫とは毎日のように会っていたし

姫の性格を考えると変に格式張ると絶対怒られるしな。

「ふあああああつ」

あくびをする余裕も生まれるのさ。

すると、蓮華がジト目で

「一刀、随分余裕じゃない」

こう言った。

「だって、俺は毎日姫……陛下と会ってたし変に格式張ると怒られるって

ことも知ってるしね」

「あなたが羨ましいわよ……」

そんなやり取りをしていると

「お迎えの勅使がいらっしやいました！」

ようやく来たか。

全員が定位置に着きそれを確認した冥琳は
頷き

「勅使様をお通しせよ！」

そう叫んだ。

扉が開き一人の男が数人の従者を
引き連れてくる。

その男に俺は見覚えがあつた。

「豪人……」

そう、その男は豪人だった。

二年前に龍也に不意打ちをくらった男。

『直属護衛者』で俺に槍を教えてくれた男。

三国の王達は立ちあがって段下に降りる。

「献帝の旨を帯びて参りました、曹孟徳様、孫仲謀様、劉玄德様。
勅使の豪人と申します」

「お役目ご苦労、豪人殿」

「それでは、行きましょう。

帝様は早く皆さまとお会いしたいと申し上げておりましたので」

豪人がそう言うと同行者全員が頷く。

それを見た豪人は玉座の間から出て行く。

同行者全員はそれに着いて行く。

俺はそれとなく豪人の横に行き豪人にしか聞こえないように言う。

「何でお前が勅使なんだよ豪人」

「姫の命令だ。仕方あるまい」

「姫が献帝だつて言うのに即応出来たのかよ？」

「姫がどのようなお方でも俺は姫に絶対の忠誠をおいている」

「そうかよ。相変わらずの忠誠心何だな『姫の忠犬』」

「うるさい。その名で呼ぶな」

「はいはい」

『姫の忠犬』と言うのは豪人の忠誠心が強いことから豪人に付けられたあだ名だ。
本人は気に入らないらしいが。

城の前

城の前には相当立派な馬車が用意されていた。

何が立派つてもう言葉で表現出来ないほど立派なんだ！

「どうぞ」

豪人は扉を開き中に入るように催促する。

全員が中に入ったことを確認し自分も入る。

「出立せよ！」

豪人がそう言うと馬車が出発した。

「ところで豪人、俺にも敬語を使うつもりか？」

俺がそう聞くと俺と豪人以外の全員が顔を真青にしたが豪人はこう答えた。

「お前に敬語を使うなど天が落ちてもありえん」

「ひでえ……」

「日頃の行いが悪い」

「俺、お前に何かしたっけ？」

「俺はお前の先輩だろうが」

「ああ、そうっただな。先輩でも後から入って来た奴に負けた先輩だったな」

俺がそう言うと豪人は一瞬不機嫌そうな顔をしたが興味を無くしたように顔をそらした。

「ご、ご主人様は勅使様と知り合いなのでしゅか？」

雛里、囁んでるよ

「まあね。」

俺と同じ組織に入って俺より二年先輩……だったよな？」

「ああ」

こりゃ完全に機嫌を損ねたな……

「そういえば、お前が来てるってことは他にも来てる奴が居んのか？」

「ああ、俺の他にも龍人や那美それに周牙さんも来てるぞ」

「俺をいじめたいのか？周牙はまだ良い。

那美とか論外だろ……」

「諦める」

そう言った豪人の目は同情の目だった。

華琳達に色々聞かれたが会えば分かると誤魔化しておいた。

はあ……那美には絶対に会いたくない……

二十二話 朝廷参内（後編）

俺達は今目的の街に着いて姫が居る場所に居る。
何と言うか……

俺が思っていたよりも参内はすごく簡単な物だった。
堅苦しい挨拶やらは最初だけ後は姫が名と字を預けて今は雑談をしている。

「それですねー一刀つてがこう言っただですよ。
『姫を傷つける奴は絶対に許さない！』って」

「は、はあ……」

雑談と言っても俺が姫に言ったことやら
俺のどこが良いやらの話。

何でも姫は俺の秘密を百個ぐらい知っているらしい。
姫ってもしかしてストーカー？
それに聞いている方は詰まらない……

「姫……陛下、そろそろ本題に……」

「そうですね？しょうがないですね」

やっと本題か……

「ここに居る皆一刀のこと好きでしょう？」

「「「え？」「」」

いきなり何を言い出しますかこの皇帝殿は。

「はい」

少しも困惑せずに答えやがった！

「で、ですね、あなた達が一刀とやって行くには三国を一つにして一刀をその頂点にする必要があるんですよ」

「？」

全員首を傾げる。

姫が言ってることが分からないようだ。

「豪人！捕捉説明よろしくお願いします」

姫がそう言うのと豪人は咳払いを一回して説明を始める。

「捕捉すると今三国の将達は洛陽に居るがすぐに自分達の国に行くわけだ。」

だが、三国共一刀が欲しいだろう？」

「（こくこく）」

全員息ぴったりだな。

「そうになると、蜀はともかく呉と魏の全面戦争になる可能性があるんだ」

豪人がそう言うのと全員納得した顔だ。

隣に居た華琳から『その手があったわね』と聞こえたのは気のせいであって欲しい。

「だから、三国を一つの国にしその一刀をその国の所属か頂点にしてしまえば良いと俺は思う訳だが陛下は一刀を中途半端な地位に

したくないらしくてな。

一刀をその国の頂点にしたいらしい」

「一刀は一国の主に相応しい人物です！私が保証します！」

姫はそう言って胸を張った。

他の皆も頷いている。

「どうするんですか？」

雛里がそう聞くと姫は首を傾げる。

「どうする、とは？」

「ごしゅ……一刀さんが一国の主に相応しいのは知っています。

一国の主にしたいならそれ相応の官位を与えるべきだと思います」

「ふふつ、流石、鳳雛ですね。

あなたの言うとおりです。

私は一刀を丞相にしようかと思っています」

「「「！？」」「」」

俺が丞相！？

漢王朝において君主を補佐する最高位の官使じゃないか！

「陛下！そこまで俺を上げることは無いじゃないですか！
何で俺が……」

「言っただでしょう？一刀を半端な所で止めたくないのです。
本当なら皇帝にまで上げたいですけどそれは……」

「民が許さないでしょうね……」

「ええ」

俺達のやり取りを聞いても桃香は分からないように首を傾げている。
俺は桃香にも分かるように説明を始める。

「民は俺のことを信用してないんだよ。

いきなり出てきた奴が丞相になるだけでもヤバイのに
皇帝になるなんて道は危険過ぎて渡れないって」

「……………あー！成程」

今の説明で多分三秒も考えずに分かると思うんだけど……
桃香だからか。

「じゃあさ！貂蝉さんが私達にしたように民の皆さんにも
他の世界の記憶を移せば？」

「あゝそれ無理」

桃香にしては良い案だけど……

「どうして？」

「別の世界では死んでいる人も居るから。

祭さんや雪蓮、それに冥琳は後悔しないで死んでいったけど

他の民は後悔して死んでいったんだ。

俺も華琳の前から消えた時は後悔しながら行つたから泣いたんだよ。
でも、俺の場合はそれだけで済んだと言える」

「？」

「他の世界の記憶を受け継ぐってことは他の世界で感じたことを受け継ぐって

ことなんだよ。

死んだ時の無念もね。

その時の無念を感じて正気を保てる人は居ないんだよ」

「……そうなんだ」

「ああ、だから記憶を移すのは無理」

「一刀が努力するしかないでしょうね」

道は長いな……

でも、それ以外に方法が無いんだよなあ……

「と、言う訳でまた堅苦しい形式を取らなければなりません……」

残念そうに言わないでください……

姫は玉座に戻りこう言った。

「北郷一刀殿！ここに！」

俺はそう言われて段上に上る。

「貴殿がこれから永遠の平和を創ると信じ貴殿を丞相に任ず！以降、佩剣のまま禁裏に上ること、同じく佩剣のまま段上に上ることを許す！」

姫はそう言つて俺に印綬を渡す。

多分、これからこき使われるんだろうな……はあ……

「一刀、頑張つて……」

三国を統合するのはあなたがやってください」

そう言つた姫の顔は最初に俺を送つた時とは違い笑顔だった。
俺は跪きこつ答えた。

「全身全霊を持って……」

姫は俺に囁く。

「一刀、一言くらい何か言いましょう」

「何を言えば？」

「あなたの思つたいことを……」

「御意……」

俺は立ちあがり段下に居る皆にこう言った。

「俺は人間だ。

間違えることもあるだろう。

だが！間違っても皆を戦に巻き込む気は無い！

俺が出来ることなんて少ない！

だが！皆が協力してくれば出来ることは多くなる！

皆！永遠の平和を創る為に力を貸してくれ！」

「良くぞ申した、一刀よこれから平和の為に
尽力せよ！」

「御意！」

俺はその返事と共に平和の為に尽力することを誓った。

二十三話 舞台の裏側

世界のどこか

第三者視点

そこには二人の少年と二人の筋肉だるまが居た。
眼鏡をかけた少年が言う。

「この外史は異形ですね。
まさか、彼女まで物語に影響しているとは……」

ピンクの女性物の下着を着ている筋肉だるまが頷き
こう言った。

「そうね〜でも、彼女はちゃんと影響値を考えているわよ？
問題は無いわ〜」

その中でもまともそうな少年も頷く。

「貂蟬の言う通りだろう。
卑弥呼はどう思う？」

卑弥呼と呼ばれた筋肉だるまは少し考えて答える。

「わしも卑弥呼と考えていることは同じじゃ。
だが……」

「三国の王達を狙った者達のことですね」

卑弥呼は頷く。

「うむ、わしの勘じゃが今回の敵は外史の人間では無い。
恐らく……」

「正史の人間と言う訳ですか……」

その場に沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは貂蝉だった。

「卑弥呼の勘が当たった時のことを考えておきましょう。
もし、勘が当たったらご主人様に全力で力を貸しても
許されるでしょう」

その時の為に準備をしましょう」

貂蝉がそう言つと貂蝉以外全員頷きその場から消えた。
残ったのは貂蝉だけだった。

「ご主人様、気をつけて……
今回の敵は強いわよ……」

貂蝉はそう言つて消えた。
心配そうな顔をしながら……

二十四話 謎の若者

姫に丞相に命じられてから一週間が経った頃。

俺は街の視察に来ていた。

護衛は恋、愛紗、春蘭、秋蘭、明命、思春の六人。

最初は護衛なんて要らないって言ったんだけど……

『ご主人様は大切な人なの。聞き分けて』

『桃香の言う通りよ。一刀』

『護衛はつけなくちゃ駄目よ、一刀』

と、三国の王に言われては俺も逆らう訳にはいかず
こうして護衛を連れている訳だ。

「視察と言ってもただ出かけるだけなのに……」

「出かけるだけ、と言っても敵がどこから狙ってくるか分かりませ
ん。

護衛は必要なのです」

「……愛紗の言う通り。ご主人様は恋達を守る」

「恋の言う通りだぞ、北郷！心配しなくても私達を守ってやる！」

「どっちかって言うと俺に護衛つけるんじゃないかって桃香達に護衛つ
けて欲しいんだけど。

最初に狙われたのは桃香達じゃん」

俺がそう言つと愛紗が『安心してください』と言いたげな表情で答
える。

「安心してください。桃香様達にはきちんと護衛が付いています」

「なら、いいけどさあ……はあ……」

俺が溜め息をつきながら歩いていると前から若者が歩いてくる。

愛紗達は警戒するが俺はその若者に殺気が無いから警戒はしなかった。

すると、その若者は俺に話かけてくる。

「その剣……打ち直しが必要ですね」

「あ、マジ？俺も最近違和感があったんだけどそんなに？」

「ええ、何より色々な感情を詰め過ぎです。

一度出してあげた方が良いでしょう」

「マジか……」

俺が困った顔をしていると愛紗達は啞然としている。

「あ、ごめん。たまに居るんだよ。剣の中が見える人が」

「剣の中……ですか？」

「うん、君そう言う人でしょ？」

「ええ、どうやらこの剣以外は打ち直しは必要無い様です。

この剣私が打ち直しでしょうか？」

「俺も手伝おうか？と言うか日本刀はここじゃ珍しいから打ちにく

「いんじゃない？」

「大丈夫です。私は倭の出ですので」

「！そう言うことが……」

「じゃ、頼むよ」

「お任せください」

俺が記憶刀を渡すと若者は歩いて自分の工房に向かって歩いて行く。

「一刀様、大丈夫なのですか？
言ってくだされば追いかけますが……」

「大丈夫。記憶刀は俺の半身だからどこにあっても場所は分かるんだ」

「そうですか」

明命が後に下がると今度は思春が前に出る。

「で、何に気付いた？」

「ん？」

「とぼけるな」

「俺、日本刀って言ったよね？」

「ああ」

「この時代に日本ってあったわけ？」

「「「!!!!!!」」」

「そう言うこと。多分貂蟬とか姫と同類だよ。

それに、もし、記憶刀が潰されてもすぐに修復出来るし」

「大丈夫なのか？北郷」

「大丈夫！大丈夫！さ！行こうよ！」

俺はそう言って皆を連れて歩き出す。

でも、俺にだって不安はあったのは秘密だ。

番外編　○馬の一刀君

「良い天気だな～出かけたいな～」

俺は今部屋に居る。

そして、仕事と言う拷問を受けている。

「あ～あ～めんどくさいな～次は～？
街の西部の開発計画の予算案の議案書～？
何々～？」

書類を見ては印鑑を押すだけなのだが
目を通すのがめんどくさい。
はつきり言う。

こんなの俺がやらなくてもいいと思う。
だって、さっき猫の餌の領収書とか
酒家の領収書とかあったぞ。

こんなの出した犯人は分かってる。
後で絶対お仕置きしてやる！
今夜はたっぷり焦らしてやるぜ！

「今度はからくりの為の道具の領収書！？
あいつ……」

もう一人増えたな。
ふ……

今夜は俺の手が忙しそうだ……

「今度は……ん？俺宛の手紙だな」

俺はその手紙を読む。

「『一刀様へ

恥を承知で申し上げます。

今夜は私を呼んでください。

亞莎より』」

クソ！お仕置きと亞莎との約束……

どっちを優先させるべきなんだ！？

「ん？まだ何か書いてあるな。

何々？『もし、誰かをお仕置きなさる予定があるならば私も混ぜてください』 良し分かった！」

今日は忙しくなるな。

しかし、俺の体力持つか……

「こう言う時は仲間の知恵を借りるか……」

俺の仲間なら何と言うか想像中……

『『『死ね！男の敵が！』』』

はい罵倒されました

ん？そう言えば何か忘れているような……

「あ！餞別の黒いリュック！」

俺は黒いリュックを探す。

「あつた！俺の仲間よ！俺に力を！」

俺はリュックを開く。

あつた……夜用の物が……
大量に……

「これで俺の身体は持つな。
良かった……」

後は仕事をして肅清すべき者達を捕まえて肅清するだけだ。

「あつはははははははははははははははは！」

因みにその日の夜肅清＆亞莎とのお楽しみの最中に
桃香と紫苑と祭さんが来てたっぷり絞りられた……

番外編 ○馬の一刀君（後書き）

今回は一刀の○馬っぷりを見て頂きましたが

この話を書いた理由は何と云うか話が思い浮かばなかったの
つなぎです。

明日はちゃんと本編を書きます。

では、また次回。

二十五話 一刀の仕事？（前書き）

こんにちわ

お久しぶりです。

本当は土曜日まで更新出来ないと

思っていたのですが今日更新出来ました。

では、始まり

二十五話 一刀の仕事？

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

俺の前に居て沈黙しているのは愛紗、華琳、冥琳の三人。
俺は今自分の部屋に居て正座している。

何でこんなことになったかと言うと約一時間前まで遡る。

俺は仕事を半分程片づけて息抜きに街に行ったんだ。

適当に肉まんを買って食べてたら若者二人が喧嘩してたんだ。

俺はしょうがないからその喧嘩を止めて警備隊の連中に引き渡した。
と、そこまでは良かった！そこまでは良かったんだ！

若者を警備隊に引き渡してどこに行こうか迷っていたら

その騒ぎを聞きつけた愛紗に見つかって引きずられて城に戻ってきたんだ。

「北郷、私達は何故怒っているか分かるか？」

「えっと、護衛を連れずに街に出たことですか？」

「分かっているなら何でそんなことをしたのかしら？」

華琳さん、絶をしまってください。
おねがいします。

「ご主人様は我等にとって大切な方なのです。
今度からこのようなことはしないで頂きたい」

「本当は護衛を付けずにもう一回行きたいんだけどね」

「「「（ギロリ）」」」

「理由ありますから睨まないでください！」

俺がそう言つと三人は睨むのをやめてくれた。
あー怖かった。

「理由をお聞きしましょうか？
ご主人様」

「ああ」

俺が頷くと三人は適当に座る。
それを見て俺は始める。

「街に出たのは民の俺に対する評価を聞きたかったんだよ」

「「「！」」」

三人は固まってしまった。

三人は知らせないようにしてたんだな。

だから、出来る限り俺に外出させないようにしてたんだ。

「……聞いたのですか？」

「ああ、今の地位を金で買った丞相って言う評判をね。まあ、最初から予想はしてたよ。」

俺はこの世界では何もしてないんだから」

「「「………」」」

「俺が今するべきなのは俺に対する民の評判を上げることだよ。そんなことがなくても俺は地位なんか気にせず出かけたいんだ。でも、今の地位がその邪魔をするんだ。抜け出すしかないじゃないか……」

「「「………」」」

三人は俯いてしまった。

流石に言い過ぎたかな。

「言い過ぎたね。ごめん。」

でもね、將軍は顔が知れてるから

將軍を護衛に付ける訳にはいかないんだよ」

「そうだな、北郷の言う通りだ。」

ふむ……ならば隠密の二人を護衛にしよう」

「ああ、確かに明命と思春なら大丈夫そうだね」

「そうだろう？だからもう一人で出かけないでくれよ？」

「ああ、二人もそれで良いかい？」

俺は二人に言った。

二人は頷きながらこう答えた。

「構わないわ。一刀が一人で出かけるのをやめてくれれば」

「私も構いません」

「良し！なら今から俺は鍛練に……」

鍛練に行こうと部屋の出口に向かうと肩を掴まれる。
振り向くと美少女と美女三人の素敵な笑顔。

「あの、何でしょうか？」

「北郷はまだ仕事を終わらせてなかったよな？」

「えっと、それは……」

「仕事を終わらせてください」

「え、あの、その……」

「良いわね？一刀」

「はい……」

くそ……鍛練がしたい……
出かけたい……

二十六話 敵の襲撃

「翠、ついて来てくれてありがとな」

「護衛だから良いよ」

今俺は翠と街に来ている。

翠が鍛練をしていたから仕事を十分に終わらせ
翠を街に行くから護衛してくれと言って誘った。
何故か翠は顔を赤くしている。

「次は服屋にでも行くか」

「？誰の服を買うんだ？」

「翠の」

「へ？」

「だから、翠の服を買うんだよ」

「えーーーーー!？」

ふっ、予想通りの反応だな。

「翠も女の子なんだから服位買おっぜ」

「分かったよ……」

良し！折れた！

今から行く服屋は俺が既に話をつけているのだよ。
翠に『あの服』を着せるのは楽しみだなあ……

「早く行こうぜ、翠」

「う、うん」

服屋

「いらっしましー！今日はどのような服を？」

打ち合わせ通り店主が俺に話しかけてくる。

「彼女に合うような服を」

「かしこまりましたー！どうぞこちらにー！」

「あ、ああ」

店主は打ち合わせ通り翠を連れて店の奥に連れて行く。

「楽しみだなあ……」

俺は翠が『あの服』を着た姿を想像しながら待つ。
そして、少し経って

「ま、待たせたな、ご主人様」

「……予想以上」

予想以上に可愛すぎる！

俺が店主に作って欲しいと言ったのはメイド服。

月の様なメイド服である。

めちゃくちゃ似合う。

言葉に出来ない位似合う。

「どうだ？」

「似合うよ翠！似合いすぎてるよー！」

「そ、そうか？」

「ああ！」

「良かった……」

笑顔可愛い

マジで癒される

「じゃあ、着替えてくるよ」

「ああ」

翠そう言うては試着室に入り着替える。

翠の着替えが終わりいつもの服を着て服を買い店を出る。
そして、城の帰り道の途中。

「~~~~~」

「上機嫌だな、翠」

「当たり前だろう？ご主人様に服を買ってもらったんだから」

「そうか」

今日は良い日だ。

本当に……

最初から俺に殺気を向けている奴等が居なければ……

「翠、ちょっと俺用事があるから先に帰っててくれないか？」

翠を巻き込む訳にはいかない。

先に帰ってもらった方が良いという判断だったが……

「ご主人様、あまり私をなめるなよ？」

気付いてるさ」

「マジ？」

「ああ、ご主人様武器は？」

「素手で行く。問題は無い」

「分かった。後五歩進んだら後に振り向いて戦うぞ」

一歩

「ああ、服はそこに置いとけよ？汚したら承知しないからな？」

二歩

「分かってるよ」

三歩

「本当か？」

四歩

「本当だ……よ！」

五歩！

俺は後を振り向き敵に向かって走る。

敵は剣を構えるが気にしない。

一番近くに居た奴に蹴りかかる。

バキンッ！

敵が構えていた剣はそんな音と共に折れる。

そして、一瞬の隙が出来る。

俺はその隙を見逃す程甘くない。

俺はその場で回転しその勢いを使い敵を拳で殴る。

バキッ！

この感触……成程。

そう言うことか。

こいつら傀儡か。

なら操っている奴を見つければ良いか。

「翠！俺は少し動けなくなるから俺を守ってくれ！」

「分かった！」

俺は近くに居た奴の腹に正拳突きをくらわせる。

ゴッ！

「少し辿らせてもらっぜ」

俺はそいつに気を流し操っている奴を探す。

「……………見つけた！そこだ！」

俺はそこら辺に落ちていた石を投げる。

「痛っ！もう！女の子に石を投げるとかどう言う教育受けたの！？」

「敵には容赦するなっと言う教育だよ。（来い鬼神槍）」

俺は小声で鬼神槍を呼んだ。

すぐに来る筈だ。

少し時間を稼ぐか……

「あんた何者だ？」

「あんたの敵だよ」

「そんなことは分かってるんだよ。
どんな組織に所属しているかって聞いてるんだよ」

「教えると思う？」

「教えてもらうぜ」

俺は飛んで来た鬼神槍を取る。

「すごい槍だねそれ」

「ああ、俺の半身だからな。
俺が呼べばちゃんと来る。
それに話せるぞ」

「へえ、すごいねえでも、何かおまけが来たよ？」

「おまけ？」

俺はそいつが見ている方を見る。
そこには三国の将達が居た。

「一刀——！大丈夫かいなー！？」

「ああ！大丈夫だ！」

「あゝ不味いなゝ流石に三国の武将を相手には出来ないよゝ」

「逃がすと思ってるの?」

「逃げるよ。一瞬の目くらまし位にしか出来ないかもしれないけど
ちよつとした技があるからね」

何だ?あいつの気が……
まさか!

「やばい!」

「くらえ!」

すると、周りを光が包む。

その光りが消えると普通の光景に戻る。

いや、普通では無いか……

「あの女の人が消えたよ!」

「いや、幻を見せられてる。

恐らく今の内に逃げてるんだろう」

「ねえ、一刀今の状況ってやばかったりする?」

「ああ、見る」

俺はそう言って裏道の方を指す。
そこには民が歩いていていた。

「民がどうかしたの?」

「よく見る」

その民の目は死んだ目をしていた。

「ちょ、こいつ、大丈夫なの？」

「幻だつて言つたろ？こいつは俺達の精神を壊す為に作られてる。すぐに幻をぶっ壊すから精神を強く保てよ」

「え？」

俺は幻を打ち破る為に気を集める。
そして……

「消える！」

俺がそう言った瞬間周りを光が包み込む。
そして、光が消えるといつも光景に戻る。

「ご主人様？ここは幻じゃないよね？」

「ああ、俺が元に戻した。

それより今回のことを姫に報告しよう。

姫に指示をもらうべきだ」

姫なら何か指示をくれる筈だ。

そんなことを思いながら俺達は姫の城に行く準備をする為に城に向かって歩き出した。

二十七話 動き始める三国

俺達は今姫が居る城の玉座の間に居る。
今回のことを報告する為だ。

「と言う訳で陛下の指示を頂きに参りました。
私としては早く三国を統合するのが良いと思います」

俺がそう言つと姫は頷く。

「ええ、私も同じ意見です。
早く三国を統一した方が良いでしょう。
敵が幻を使えるならまとまって居た方が良いでしょう」

「なら、動きますか？」

「ええ。ここで命令を発してください」

「御意」

俺はそう返事をする華琳達に向かって号令する。

「劉玄德！孫伯符！曹孟徳！」

「「「はっ！」「」」

「各々の領地に戻り三国統一の準備をせよ！」

「「「御意！」「」」

三人がそう返事したのを聞くと姫は満足そうな顔をした。

「陛下、私は彼女達が準備をしている間どこに居れば？」

「私達の所に居てください。」

どこかの一国に留まるのは不味いので」

「ぎよ……御意！」

最初の一回で返事をしようとしたが華琳達のあまりの殺気に一瞬たじろいでしまった。

俺が何をしたんだよ……

「ふふつ、では、解散です」

姫がそう言うのと皆が玉座の間から出て行く。

皆出て行く時に俺のことを見ていたが……

全員出て行くのを確認すると姫はこう言った。

「誰か一刀を部屋に案内してください」

姫がそう言うと周牙が手を上げる。

「私が」

「分かりました。」

よろしく願います」

「はい」

周牙は多分何か考えてるな……
返事をしながら俺を睨んでるし……

「こつちだ」

「ああ」

俺はそう返事をして周牙についていく。

部屋に行く途中。

「一刀」

「ん？何だ？」

歩いている最中に周牙に呼ばれる。

「いつになったら姫のことを『恩人』としてではなく
一人の『女性』として見るんだ？」

「……………」

その質問は俺が周牙にいつもされていた質問だった。

「何度も言ってたんだろ？そんな日は来ないって」

「だが、お前が姫を『女性』として見るようになるのは

『兄貴』の願いなんだ」

その目は懇願していた。
だが……

「無理だつての。

いくら『あの人』の願いでも……

俺は『あの人』を差置いて姫を幸せに出来ねえよ」

俺が唯一敬語を使う人を差置いてなんてことは出来ない……

「一刀！姫は……！」

「分かつてる。

お前に言われなくても俺は何度も告白されてんだ。
だが、知ってるだろ？

俺は何度も断ってるんだ」

「……………」

「俺は『あの人』を超えることも出来ないし

『あの人』のようになることも出来ねえよ」

「『兄貴』はお前が自分を超えると言っていたぞ」

「それは買被り過ぎだ。

俺はそこまで強くないし

良くできて無い」

俺がそう言つと周牙は部屋に着くまでずっと黙っていた。

周牙も姫も俺を買被り過ぎてる。
何で皆俺に過度な期待を寄せるんだろう……

二十七話 動き始める三国（後書き）

8 / 30日タイトルが本文とあっていなかったの
で編集しました。

二十八話 『盾』となった理由（前編）（前書き）

こんにちわ

今回は一刀が一刀が自分のことを『盾としての運命』を背負った理由が

明らかになります。

上手く書けるかは分かりませんがよろしく願います。

では、始まり

二十八話 『盾』となった理由（前編）

ここは……夢の中か。

今度はどんな夢なんだ？

「……郷……北……ほ……郷」

声が聞こえる……

懐かしい声が聞こえる……

そうか……これは『あの人』が生きていた頃の夢か……

「北郷、起きろ」

「んん……おはようございます」

「おはよう、北郷」

この人は鋼牙さん。

俺の恩人で俺が唯一『直属護衛者』の中で敬語で話す人だ。

「昨日は寝不足だったのか？」

「え、ええ、そんなところです」

未来から夢で見てるなんて言えないよな……

「そうか、じゃあ飯食いに行くぞ、飯！」

「お供します」

俺は返事して立って鋼牙さんの後について行く。
これはいつもの光景だ。

俺はいつも鋼牙さんと行動している。
任務の時もプライベートの時も鋼牙さんは俺を弟の様に扱ってくれた。

俺は毎日鋼牙さんに近づく為に鍛練をしている。
最初の頃は全く敵わなかったけど最近では良い勝負が出来るようになった。

少し時間が進み鍛練場

「おらあっ！」

「ふっ！」

ガンッ！

今俺達は木刀で打ち合っている。

最初は鋼牙さんの太刀筋が全然見えなくてボコボコにされたんだよなあ……

「隙あり！」

「え？うわあっ！」

ガンッ！

隙を見つけた牙さんは俺の木刀を弾き飛ばす。

「だぁー！ー！負けた！」

「何か考え事をしてただろ？
何考えてたんだ？」

「俺が組織に入って最初の頃のことですよ。
俺は少し強くなれたなって」

「少しなんてもんじゃねえだろ。
お前は相当成長してるよ」

鋼牙さんはそう言いながら木刀を壁にかける。
俺も床に落ちた木刀を拾い同じように壁にかける。

「そうですか？」

鋼牙さんってたまに過大評価をするからな……」

「本当だつての」

鋼牙さんはそう言って俺の頭に手刀を当てる。

……めちゃくちゃ痛い。

周牙さん絶対本気でやっただろ……

「お前は俺を超えられるよ。
俺はそう信じてる」

「そつなりますかね？」

「なる！と言つか俺が超えさせる！」

「え？」

やばい！この人は鍛練大好き人間だったじゃないか！
俺死亡フラグ立ったぞ！

「まだまだやるぞ！」

「やっぱりですかー！ー！」

その後五時間あまり鍛練（というか一方的ないじめ）をされて
俺は筋肉痛になったのは言うまでも無い……

二十九話 『盾』となった理由（中編）

俺は鋼牙さんとの鍛練を終えた後鍛練場で
鋼牙さんと大の字で横になっていた。

「あゝ痛てえゝ体中が痛いっすゝ」

明日任務なのに加減せずにやりやがって……

「ふっ、大丈夫か？」

鋼牙さんは他人事の様に笑いながらそう言った。
俺は仕返しをする為に大げさに苦しんだように言う。

「無理っす……明日の任務は周牙さんだけで行ってくださいゝ」

「馬鹿、大げさに言ってるって分かってるんだよ」

「バレましたか」

「何年付き合ってると思ってるんだ？」

「何言ってるんですか……」

俺達が会ってからまだ十ヶ月しか経ってないじゃないですか」

「言葉のあやだよ！気にすんな！」

鋼牙さんはそう言いながら上体を起こして右手で俺の腹をバシバシ叩く。

……めちやくちや痛い……

鋼牙さんはある程度叩くのをやめると急に真顔になってこう言った。

「さっきお前が俺を超える様になるって言ったのは嘘じゃないぜ」

「え？」

「お前は俺を超えるようになる。
絶対にだ」

「それはありませんよ。」

俺は今あなたの背中を追いかけてます。
俺の目標はあなたと同じ所に立つことが俺の目標です」

「そうか……なら同じ所に立った後は俺を追いつ抜くのを目標にしろ」
やっぱりこの人には敵わないな……

「はい、分かりました」

その返事を聞いた鋼牙さんは立って満足したように笑い俺に拳を差し出た。

俺はその拳に自分の拳を合わせた。

鋼牙さんを超えるという誓いを乗せて……

でも、俺は気付いていなかったんだ……

あの任務であんなことになるって……

三十話 『盾』となった理由（後編）（前書き）

こんにちわ

皆さん、お久しぶりか分かりませんがお久しぶりで

最近忙しくて更新できませんでした（泣）

今日はちゃんと更新します。

では、始まり

三十話 『盾』となった理由（後編）

俺と鋼牙さんは任務でヤクザを始末する為に
対象のヤクザ達が根城にしている場所に来ていた。
俺は小声で奇襲のタイミングを聞く。

「鋼牙さん、いつ奇襲を？」

「奥に座ってる奴が見えるか？あいつがボスだ」

俺は鋼牙さんが指した奴を探す。

……見つけた。

「それがどうかしましたか？」

「あいつは十分に一度煙草を吸う。
その時に部下が煙草に火をつける。
その時に突撃だ」

「分かりました」

俺はそう返事をしてその瞬間を待つ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

その場に重い沈黙が流れる。

俺は腰にある記憶刀の様子を見る。

……問題は無い。

俺の仕事は敵を殺すことだ……

大したことじゃない……

俺はゆっくりと視線を上げて敵を見る。

敵のリーダーは煙草を咥えていた。

あともう少して突撃の瞬間が来る。

「……………っ！」

緊張感が一気に湧き上がる。

そんな俺の心情に関わらず部下はズボンのポケットに手を入れる。

そして、ライターを取り出した。

そして、ゆっくりとライターを煙草に近づけ……………

火をつけた。

「一刀！行くぞ！」

鋼牙さんが俺を呼ぶ。

鋼牙さんは既に自分の得物の剣を持っていた。

俺も記憶刀を抜きこつ返事をした。

「了解！」

俺がそう返事をするのと周牙さんはボスに向かって走る。
俺もそれに続き走る。

それに気付いたボスは部下に命令をする。

「侵入者だ！殺せ！」

部下は拳銃を構える。

だが、もう遅い。

鋼牙さんと俺は拳銃を構えている奴等の所まで行き全員を斬る。

「ぐあっ！」

「ぎゃあっ！」

そんな声と共に拳銃を構えていた奴等は全員死んだ。

後居るのはボスの隣に居る二人とボスのみ。

俺は右に居る奴に向かって

鋼牙さんは左に居る奴に向かって走り剣を振う。

「ぐあっ！」

二人は真つ二つになって死んだ。

俺達はボスに向かって剣を突きつける。

「お、お前等は一体……」

その質問を最後まで聞かず鋼牙さんは剣をボスに突き刺した。

「ぐあっ！」

ボスが倒れたのを確認して鋼牙さんは額に付いた汗を拭う。

「さーて、任務成功だ。

帰って酒でも『バアアアン！』ぐうつ！」

「え？」

今の音は銃声。

俺はゆっくりと後を向く。

後には斬られた腹を抑えながら拳銃を構えていた男が居た。

「うわあああああっ！」

俺は考えるよりも先にその男に向かって走り剣を振り下ろした。

「ぐはあっ！」

俺はその男が死んだのを確認すると俺は鋼牙さんに駆け寄る。

「鋼牙さん！大丈夫ですか！？」

鋼牙さんの傷は深かった。

出血量も半端じゃない。

「周牙さん！早く医者に……！」

そんなことを言いながら俺は分かっていた。
鋼牙さんはもう間に合わないということに……
鋼牙さんも分かっていたんだろう。
首を振ってこう言った。

「一刀、俺はもう間に合わない……
だから、一つだけお前に頼みたいことがある」

「何でも……！」

その返事を聞いた鋼牙さんは満足した顔になりこう続けた。

「俺が姫のことを好きなのは知ってるな？」

「はい……」

「お前になら姫を譲れるんだ……
姫を頼む」

「鋼牙さん……俺は……」

「大丈夫だ……お前はいつか俺を超える……
頼んだぞ……一刀……」

そう言って鋼牙さんは目を瞑った……

「鋼牙さん？ 鋼牙さん！？ 認めませんよ！ 鋼牙さん……！」

「鋼牙さん！！！」

俺はそう叫んで跳び起きる。

「あれ？夢……？」

夢に吞まれたか……

まだまだ俺も未熟だな……

「鋼牙さん、俺はこれからあなたを超える為に頑張ってみます。
だから、見ててくださいね……」

俺はそう言いながらもう一度横になった……

第三者視点

世界のどこか

そこは玉座の間

玉座の間に居るのは複数の人間。

玉座には若い男が座っていた。

そして、段下には一刀に幻を見せた少女が居た。

「成程な、つまり北郷一刀が居たから諦めたか？」

「うん、何か問題でも？」

「無いな。」

お前じゃ北郷一刀に勝てないことは分かった」

「でしょ？」

少女がそう言う一人の少年が言う。

「これからいかがいたします？」

三国が分かれている間『直属護衛者』が護衛にあたっている筈です。それに奇襲をかけるのは愚策かと……」

「ああ、分かってる。」

それに貂蝉や卑弥呼達が動き出したようだ。

だが、構わん。

俺達はやれることをするのみだ……」

その男がそう言う全員臣下の礼をとり全員が息を合わせてこう言った。

「『『全ては正史の為に……』』」

それを見た男はこう呟いた。

「さあ、否定の物語の始まりだぞ？
お前はどっ動くんだ？北郷一刀」

その笑みは狂気を含み

その場に居る者達を狂気に引きずりこむ笑みだった……

三十話 『盾』となった理由（後編）（後書き）

今日は時間の都合上こちらしか更新出来ないことをお許しください。
明日から不定期更新状態に入ります。

いつどの作品が更新出来るか私にも分かりません。

ただ、分かるのは一日に最低一作品は更新するということです。
これから応援よろしく願います。

では、また次回。

三十一話 現在VS過去（前篇）

「ふあああゝ……ねみいゝ……」

俺は街に居る。

いつもはもつと眠れるんだが……

叩き起された……

姫はいつも早寝早起きを実践させるから嫌なんだよ……

そもそも健康の為とか言うけど（ry

「つてか、最近過去の夢を見るのが多くなってきたなあ……
何か変な感じがするな……」

確か過去の夢を見る時は過去に纏わることが起こる予兆だったよな

……
何か起こるのか？

「うゝん……」

駄目だ……

どれだけ考えても分からん……

「ん？考えごとをし過ぎて道に迷ったか？
やばいなゝ……早く帰らないと……」

俺はそう呟いて城へと歩く。

しばらくして……

何だこの違和感は……

どれだけ歩いてても城に着けない？

まさか……

「幻か……！」

参ったな……

幻はかかった直後なら簡単に解けるが
もうしばらく経ったしな……

「無駄かもしれないけど幻を解く技をするかな……」

俺は集中して気を集める。

だが……

「気が集まらない……」

気が身体に入る寸前でブロックされる。

これは……この技は！

「幻とは言え懐かしいな……一刀」

声のした方を向くとそこには鋼牙さんが居た……

三十一話 現在VS過去（前篇）（後書き）

短いですがここまでです。

次回は鋼牙VS一刀の戦いです。

次回を楽しみにしててください。
では、また次回。

三十二話 現在VS過去（後編）

「はぁ……氣にくわねえなぁ……」

俺は溜め息をついて幻の鋼牙さんを見る。

確かにあの人に瓜二つだ。

だが……

「何がだ？」

「鋼牙はもう死んだんだよ。

その周牙さんの姿で俺の前に来ることが氣にくわねえ」

「死んだのはお前の所為だけだな」

鋼牙さんはニツコリと嫌な笑みを浮かべている。

ホント氣にくわねえ……

「そう言う冗談を言う所とかを完全コピーしてる所も氣にくわねえ

……」

「すげえだろ？」

「ああ、さっさと殺したくなるくらいにな！」

俺はそう言って鋼牙さんに殴りかかるが……

「おっと！」

鋼牙さんはそれを簡単に最小の動きでかわした。

「昔より少し早くなったな。
次はこっちからだ！」

鋼牙さんは下段からの蹴りで俺の脇腹を蹴ろうとする。
俺はそれを見てバックステップで距離を取ろうとする。
が……

「遅いぜ！」

「何！？」

鋼牙さんは一瞬で俺の後ろに来ていた。
恐らく気を使ったんだろう。

だが、俺もバカ正直にくらう気は無い。
その場で一回転して回転蹴りをする。

鋼牙さんはそれを慌てずに蹴りで相殺する。

ガッ！

その瞬間俺達は二人共バックステップで距離をつくる。

そして、しばらくお互いを見ていたが一筋の風が吹いた時俺達は動いた。

俺は顎を蹴り上げようとするが鋼牙さんは最小の動きでそれを避ける。

だが、それも計算の内だ。

俺は蹴りあげた足を蹴り降ろす。

簡単に言えば踵落とした。

「あゝめんどくせ」

「何が？」

「こんなネチネチした戦い方じゃめんどくさいと思わないか？
今じゃ俺達は実力殆んど同じなんだぜ？」

「幻のあんたが言うとか企んでるんじゃないかって思うが
それもそうだな。一気に片を着けるか……」

無論、危険なことをしようとしている。

幻の相手に攻撃されて付けられた傷は脳が錯覚して本物の傷並の痛みが出る。

だが、これ以上やっていても埒が明かないと言うのは事実だ。

俺達はバックステップで距離をつくる。

そして少しの間お互いを見た。

そしてしばらくの沈黙が流れ……お互い拳を突きだした。

ガッ！

その一撃はお互い顔に当たった。

お互いそんなことは気にせずお互いにただ自分の実力全てを出して蹴りを繰り出し拳を突き出す。

防御も避けることもしていない。

お互いもろに拳をくらっている。

先に倒れた方の負けだ。

「はああああああああっ！」

「おらああああああああっ！」

そんなことが一時間続き……決着が付いた。

「ぐはぁっ！」

倒れたのは鋼牙さんの方だった。

「強くなったじゃなえか……褒めてやるよ」

「はぁ……はぁ……当たり前だ。

鋼牙、もう俺は姫のことを一人の恩人としてではなく
一人の少女として見ようと思う。
だから……」

俺は息を整えてこう言った。

「見ててくれ」

それを聞いた鋼牙さんは笑顔になりこう返事をした。

「分かった」

そして、鋼牙さんは光りになって消えていった。
俺の意識もそこで途絶えた。

三十二話 現在VS過去（後編）（後書き）

今回の話では幻の設定が分かりにくいと思うのでここで書きます。
幻には二つの種類がある。

まず、一般的に知られているそこに無い物を見せる幻。

そして、かかった者の記憶から一番苦しい記憶を引き出しそれを具現化し相手の精神を壊す幻。

と、言っても後者はその時の光景を具現化するのではなくその記憶に関係する者を具現化するに過ぎない。

傷は本編に書いた通り脳が錯覚し体に負担がかかる。

幻は大抵が具現化された物を壊せば解ける。

と、こんな感じです。

今回の戦闘描写ですが想い浮かびませんでした……

ごめんなさい……

ですが、これから頑張りますので応援よろしく願います。
では、また次回。

三十三話 出迎え

ここはどこだ？

誰も居ない……何も無い……

暗い……ただ一面闇の世界か？

何も聞こえない……

何も……

『か……！かず……！か……と！』

『か……さ……！かず……さん！』

『ア……！ア二……！ア……キ！』

『ご……！ご主……！』

『か……と……！かず……さ……！』

『か……と……！か……！かず……！』

『ほ……！ほ……う……！』

俺を呼ぶのは誰だ？

何だか懐かしい声だ……

『『『起き（なさい）（てください）（のじゃ）（て）（ろ）……！』』』

この声は……那美と麗羽と猪々子と斗詩と白蓮と美羽と七乃か……

皆俺のことを心配してくれてるのか……
俺は起きるべきなんだな……
そんなことを思っている和一筋の光が現れる。
この光に跳びこめって言うことか……
俺はその光に跳び込んだ。

第三者視点

「っ……んん……」

一刀が起き上がるとその場に居た全員が一刀に抱きつく。

「……一刀（北郷）（さん）（アニキ）（ご主人様）！」「」

「っ！」

一刀は一瞬痛みで顔を歪めたが皆を心配させない様に笑顔で言った。

「皆、おはよう」

「……うん（はい）（おう）（ああ）！」「」

それからしばらく一刀が無事なのを確認して喜ぶ麗羽達だったが
一刀は気になることがありそれを質問する。

「何で麗羽達がここに来たんだ？」

一刀がそう聞くと麗羽は思い出した様な顔をして言った。

「そうでしたわ！三国の統合の準備が出来たから明日一刀さんには洛陽に帰還して欲しい旨を伝えろと桃香さんに言われて来たんですの！」

「たった一日で準備できたのか！？」

すると七乃が首を振って答えた。

「一刀さんは一週間は寝てたんです」

「そんなに寝てたのか！？」

「ああ、華陀が言うのは体に傷は無くても体に負担があったから華陀の針でぐっすり寝かせたそうだ」

「マジかよ……」

まあ、良い…… 那美は何で来たんだ？」

一刀がそう聞くと那美は頬を膨らせて答える。

「もう！一刀が心配だったからお見舞いに来たんだよ！

私と一刀の仲なんだから当然でしょ？」

那美がそう言うのと麗羽達は一刀をジト目で見る。

「違うんだよ！誤解だよ！那美はいつもそうやって俺をからかうんだよ！」

「『『本当に？』』」

「本当！」

一刀がそう言うと言信じたのか表情を和らげる。
そして、一刀は起き上がって言った。

「俺は少しすることがあるから着替える。
皆外に出ててくれ」

一刀がそう言うと言外に出ていくそれを見届けた一刀は
着替えを始める。

……着替えている間麗羽達が覗いていたのは余談である。
着替えが終わり一刀は部屋から出て歩いて行く。

劉協の部屋

「姫、失礼します」

「入りなさい」

一刀が劉協の部屋に入ると仕事をしている劉協の姿があった。
劉協は仕事を一度やめて一刀に振り向く。

「一刀、何か用ですか？」

一刀はある決心をしてここに来ていた。
それは……劉協に告白すると言う決心だった。

「姫、俺はあなたが好きです」

「え？」

劉協は一刀の言葉を聞いて驚いた顔をした。
今まで言っただけだった言葉が、一刀は今言ってくれたのだ。

「一刀……嬉しいです。
ありがとうございます……」

劉協は一刀に抱きついた。

一刀は優しく微笑んで劉協のことを抱き返す。

「幸せになろう……空」

一刀は劉協の真名を言う。

それは一刀達が持っている力を持っている者達の間でのプロポーズだった。

空はそれを笑顔で返す。

「ええ……陽」

そして、二人は唇を合わせた。

三十三話 出迎え（後書き）

えーっと、とりあえず皆さんに謝罪です。

二十九話から鋼牙の所が全部周牙に変わっていました……
申し訳ありませんでした……

これからはそんなことが無い様に頑張ります。

話が変わりますが真名の劉協と一刀の真名の由来ですが
劉協は全てを見守ると言う理由で空

一刀は皆の道を明るく照らすと言う理由で太陽の陽です。

これから段々と恋姫のキャラにも一刀の真名を明かして行こうかと
思っています。

では、また次回。

三十四話 帰還（前書き）

こんにちわ

そう言えば『新たな外史を創る者達』で私が『tinami』投稿している作品があると

言いましたが見て頂けたでしょうか？

言い忘れていましたがあちらではDOWANGOと名乗っています。

『新たな外史を創る者達』でも書きましたが投稿している作品を書きます。

『真・恋姫？無双 帰って来た者』

『真・恋姫？無双新たな外史を創る者達（別√）』

『学園？無双』

『寂しがり屋の女の子の為に……』

全部一刀が主人公でチート作品です。

よろしく願います。

では、こちら也开始でしょうか。

始まりです

三十四話 帰還

俺は今那美、麗羽、猪々子、北詩、白蓮、美羽、七乃の面子に護衛され洛陽に帰還している。

ここまでの人数が乗っても馬車の中はまだ余裕はある。

流石姫、あの一体金はどこから集まってきたのか知りたい。

「那美、お前姫の金はどこから集まってるのか知らないか？」

「私が知る訳無いじゃん。興味無いもん。」

私が興味あるのは一刀のことだけだもん♪」

こいつはそればかりだな……

何か麗羽達にジト目で見られてるんですけど……

俺何か悪いことしました？

「「「天の世界でも女の子を誑かしましたね（ましたわね）（したな）（だろっ）」」」

「誑かしてねえよ！というか何で那美も居るんだ！」

「ちゃんと姫から許可をとってあるから大丈夫♪」

姫……どうして許可したんですか……

後で修羅場なるじゃないですか……

あ、姫がクスクス笑ってる顔が見えた……

「ちよつといじめすぎたかな？
ねえ、袁紹さん」

「何でしょう?」

「一刀が居なくなつてから三国の将が襲われた的なこと聞いた?」

「いいえ、聞いてませんわ」

「そうか、良かった……」

「あら?一刀さん、復活しましたの?」

くそ!悪戯な笑顔を浮かべて言いやがつて……
と言つか麗羽、性格変わつてないか?

「そろそろ洛陽に着きます」

「あれ?もしかして美恵か?」

美恵は『直属護衛者』の情報収集係。
何でこいつがここに?

「姫からの命ですので」

相変わらず最低限のことしか言わない奴だ……

「それと、一刀」

「何だ?」

「姫と(自主規制)をするのは良いですがあまりにも長いです」

「何で知ってやがる!？」

何か麗羽達がジト目で見てるが関係無い！
今は目の前の問題を片づける！

「私が姫に頼まれた書類を持って姫の部屋に言ったら姫の部屋から
そう言う声が聞こえたので」

「……すみませんでした」

それは俺が悪かったな……
姫も一言言ってくれば俺も自重したのに……

「まあ、そんな話はさておきもう城門が見えましたよ」

「皆！頼む！姫を抱いたことはどうか内密にしてくれ！
何でもするから！」

「」「何でも?」「」

あれ?やばい

皆の顔がすごく良い笑顔だ
もしかして俺は言っちゃいけないことを言っちゃたのかな?

「な、何でもします……」

その後洛陽に帰って何かあったかは説明する気は無い。
ただ一っただけ言えることがあるとすれば……大変だった。
ただ、それだけが言える。

三十四話 帰還（後書き）

うゝ……何だか最近短くなり過ぎてますよねゝ……

何だか勢いで書くとアイデアが思い浮かばないんですよゝ……

何とかしようとは思っているのですが……

そんな愚痴はさておき。

明日は『tinami』の『真・恋姫？無双帰って来た者』を更新いたします。

実はまだ『真・恋姫？無双帰って来た者』の次回の話しを考えていないので更新が

遅い時間になるかもしれませんがよろしく願います。

では、また次回で。

三十五話 帰って来た記憶刀

俺は今恋と音々と一緒に街に来ている。

記憶刀を渡した若者に会う為だ。

まあ、本当は恋と音々デートしに来ただけだな。

「へボ丞相、次は服を見に行くのです！」

「ああ、分かったよ」

「……ご主人様、刀は良いの？」

「ああ、後でも良いよ。」

俺は武器をたくさん持つてるから」

まあ、無いと困ることはあるけど……

「しかし……音々は元気だなあ」

朝俺を起こしてからずっとあんな調子だろ？

あの元気は一体どこから来てるんだ？」

「ご主人様が近くに居るから」

「そうだと良いんだけどな」

「へボ丞相、服を選ぶのを手伝うのです！」

自分の上司に向かってへボ呼ばわりかよ……

まあ、音々らしいけど……

「分かったよ。」

「これなんかどうだ？」

「地味過ぎるのです！」

「これは？」

「派手すぎるのです！」

それから音々の服選びに三時間程付き合い俺は若者に刀を預けた場所に行った。

「ここら辺に居ると思ったんだけどなあ……」

そこに若者は居なかった。

すると、音々が地面に何か見つける。

「あれは何ですか？」

へボ丞相宛ての手紙みたいですが……」

確かに地面には『丞相北郷一刀様へ』と書いてある手紙が置いてあった。

「ん？これは封印手紙だな。」

何が書いてあるのかな？」

封印手紙とは封印術で手紙の封をする手紙だ。

術で封印を解かない限り開けることは勿論持つことも不可能だ。

俺は術で封印を解いて手紙を持って封を開ける。

中にはこう書いてあった。

『丞相北郷一刀様へ

あなたの刀は既に砥ぎ終えました。

地図を同封しましたのでそれを見て私の工房に来てください。

追伸

直接あなたに会えないことをお許してください。

私の店が忙しいので……

それと話は変わりますが私はあなたが察しの通りあなたの姫劉協殿と同じ外史を管理する者です。

先に言っておかないと色々面倒なことになる気がするので言っておきました。

では、工房にてお待ちしております』

「追伸が本文でも良い様な気がする……」

追伸長過ぎだろ……

「まあ、良いか。

記憶刀を取りに行くか」

俺は同封された地図を見る。

そんなに遠くは無い。

「恋、音々、ついてくるか？」

「恋は行く」

「音々も行くのです!」

「じゃ、出発!」

俺達は若者の工房に向かって歩き始めた。

若者の工房

「丞相様、来ていただき光栄です」

「ああ、それと別に敬語は良いよ。
俺はそう言うの嫌いだから」

「分かった。
俺はこっちでは趙謹と名乗っている。
よろしくな」

「ああ、ところで俺の刀はどうしたんだ?」

「ああ、少し待っててくれ」

そう言って趙謹は工房の奥の部屋に入って行った。
音々は小さな声で俺に話しかける。

「彼はどれだけすごいのですか?」

「分からないな……
底が見えないと言つか……
とにかく凄い」

恋も頷いて言った。

「あの人すごい」

「だろ？多分武の方も俺並みだと思うぜ」

「すごいのです」

そんなやりとりをしていると趙謹が俺の記憶刀を持ってくる。

「中々、扱いが難しい刀だったぜ」

「あゝ分かる。」

たまにしか喋らないのに喋る時は面倒なんだよな」

「ああ、『一刀様以外に触れさせたくない』とか言ってたしな」

「良く砥げたな」

「ああゝ早く終わらせないとお前の主に会えないぞって言ったらずくに砥がせてくれたよ」

「すげえ……記憶刀相手にすごいことするな、こいつ……」

「まあ、とにかくありがとうな。
じゃあ、俺達はこれで失礼する」

「ああ、また来いよ」

俺は記憶刀を持って恋と音々と共に城へと戻って行った。

三十六話 刺客（前書き）

こんにちわ

いや、今日実は三作品更新するつもりだったのですが

気力の問題で二作品になる可能性があります。

なので二作品だった場合はこちらとt i n a m iの『帰って来た者』
を更新します。

では、始まり

三十六話 刺客

「暇だ……」

今の俺には仕事が無い……

やることはない……

暇にも程がある……

だって三時間も何もせずにこうやって寝てるだけなんだぞ!?

仕事も終わらせちまつたし…

こんなことなら書類の仕上げるスピードを下げれば良かった……

簡単過ぎて早く終わるかもしれない予感がして一気にやったのが失敗だった……

今皆は三国が統合した後のことを考えているから暇な奴なんて居ない……

「出かけようかなあ……」

でもそうすると、愛紗から『何で護衛を付けなかったのですか!』とか

華琳から『一刀?誰に手を付けてきたのかしら?』とか言われそうだしなあ……

「……日頃の自分の行いを激しく後悔した」

元はと言えば俺が節操無しなのが悪いしなあ……

他の世界の話しだけど……あれ?今『あんたもそうだろ!』って言われたような気がする。

「こう言う時鍛練すれば良いんだろうけど……」

こう言う時に限って親父を探すと探してる間に日が変わるんだよな
あ……

那美もさつき珍しく忙しそうにしてたし……
美恵は俺の頼みなんて聞いてくれないし……

「あゝ……！つまらない……！退屈だ……！……！」

もうどうすればいいんだ……
ん？誰か走って来る音？
どうしたのかな？

「一刀様！」

走って俺の部屋の扉を開けてきたのは明命だった。

「明命……！！つまらないよ……！！！！
退屈だよ……！！！！」

俺はそう言いながら明命に抱きついた。

「か、一刀様！？ちょ、待ってください！こんなことをしてる場合
では……！」

「そつなの？じゃ、何しに来たの？」

俺は明命を離して尋ねた。

明命は顔を引き締めて答えた。

「街で大男が暴れているんです！」

凧さん達が止めようとしていますが長くもちそうに無いんです!」

「何だと!？」

凧が長くもたないだ!？」

一体どんな相手と戦ってるんだ!

「すぐ行こう!」

「はい!」

俺は記憶刀を持って部屋から走って出る。

「一刀様! 早すぎですよ!」

そんな声が聞こえたが構っていられなかった。

「無事でいろよ……凧! 紗和! 真桜!」

第三者視点

街

一刀が走っている時凧達は巨大な男と対峙していた。

その巨体は相当なもので人間が縦に三人分あるかもしれない。

「はあ!」

凧が氣力で放った蹴りも本来ならば並の相手では氣絶、悪ければ死ぬほどの威力。
だが……

パシッ！

大男はそれを片手で受け止めた。
そして、凧を放り投げる。

ゴッ！

「がはっ！」

凧は放り投げられ受身を取れずに背中から衝撃を受ける。
本来ならば受身を取って衝撃を減らすのだが今回は長く戦っている
せいで体力の低下が起きて
受身を取れなかった。

「凧ちゃん！」

「はぁ……はぁ……大丈夫だ」

「凧、少し下がれや。」

あんたさっきから攻撃を何発くらってると思ってんねん」

「問題無い」

と言っても凧自信が分かっていた。
自分にはもう戦う体力が残っていないと……

「一気に片付ける！」

凧は自分の気を右手に集める。

「くらええええつ！」

ドゴオオオオッン！

大男はその轟音と共に吹き飛んでいった。
凧は気を使い過ぎたのか膝をついた。

「まさか、ここまで気を使うとは……」

「凧！」

そう叫びながら走って来たのは愛紗と霞、恋も居る。

「凧、大丈夫かいな？」

「はい、問題はありません」

「良かったわあ……で？報告にあった大男はどこ行ったんや？」

「あそこです」

凧は大男が吹き飛んで行った方向を指す。
そこには大男が壁に埋まっている光景が広がっていた。

「凧、あれはやり過ぎだと思っぞ？」

愛紗はそう言いながら大男が居る方向に歩いて行く。

この時愛紗は油断していた。

もし、警戒していなければ気絶していても敵に近づくなと言っ行為はしなかっただろう。

「ぐわあああつ！」

男はそんな叫び声を上げながら愛紗に殴りかかる。

「なっ！」

愛紗いきなりのことに反応が遅れる。

愛紗は防御も避けることも出来ず迫りくる拳を見ていた。

自分を殺すであろうその拳を……

だが、その拳は愛紗には届かなかった。

何故なら

目の前で一刀がその拳を止めていたから……

「ご主人様？」

「ああ、愛紗大丈夫か？すこし待ってて。
すぐに終わらせるから」

「は、はい！」

その返事を聞いた一刀は大男に視線を移す。

「俺の風や紗和や真桜、それに愛紗に手を出そうなんて良い度胸だな？」

大男は相当運が悪かっただろう。

もし運が良ければただ気絶するだけで済んだ。

だが、彼女達に手を上げた。

それをした瞬間に一刀の中では死刑が決まった。

一刀は一端受け止めていた拳を離す。

それを見た大男はもう一度一刀に向かって殴りかかる。

一刀はただその拳を見ている。

だが、その表情は余裕の表情だった。

そして……

「があああつ！」

男の手首から先は無くなっていた。

「……………」

一刀は無表情で大男の首に狙いをつける。

そして……刀を薙ぎ払った。

すると、大男は砂になって消えた。

「やつぱり……………」

一刀は砂を見てそう呟いた。

「一刀、一体これは……」

「これを」

一刀は砂の中から札を取り出す。

「これはこつちで言う妖術の為の札だ。
これを使って傀儡を生み出すんだよ」

そう言いながら一刀はその札を確認する。
すると、一刀の顔が一気に驚愕の表情に変わる。

「ご主人様、どうしたのですか？」

一刀は方を震わせながらこう答えた。

「これは……あの人の……俺の恩師、鋼牙さんの札だ」

三十六話 刺客（後書き）

さて、今日は後二品出来れば更新したい所ですが出来ないかもしれません。

なので更新出来なかった場合はもう一作品を明日に回します。

一応言っておくところらの作品になります。

上手く出来るか分かりませんがよろしくお願いします。

では、また次回。

三十七話 悩みの果てに

第三者視点

「星姉さま、ご主人様は？」

「今、部屋で寝ている。」

しばらくすれば起きるだろう」

城に戻って一刀は一言『一人になりたい』そう言って部屋に籠もっていた。

今のところ一刀の部屋の様子は誰も見ていない。

「兄……」

「だ、大丈夫だよ！美似！ご主人様は怪我をしたわけじゃないんだから！」

「うむ、大丈夫だ。」

華陀殿もそう言っていた」

「でも、心配なのにな……」

そう美似が言うと長い沈黙が流れる。

それからしばらくして三人は何も言わずにその場から立ち去った。

一刀side

一刀の部屋

「……………」

俺はあの犬男から取れた札をずっと見つめていた。
この札は間違いなく鋼牙さんの札だ。
札は作った者にしか使えない……
もしかして今回の一件は……

「ありえない！」

バンッ！

俺は机を叩いて頭の中の考えを追い出す。

「あの人は死んだんだ……………」

そつ…………俺を庇って死んだんだ…………
生きている訳が無い…………

「なら、何で……………」

この札があつた？
もしかしてあの人は生きていた？
そして、外史を否定する者に操られた？

「何でそんな楽観的な結果が出てくるんだ……………」

『物事は客観的に見るべきだ』鋼牙さんがそう言ってたじゃないか

…………
もしかしたら…………

考えごとをし始めようとするがやめた。

「堂々巡りにしかならなくなるな……」

そう呟いて寝台に横になる。

そして目を瞑った。

夢の中

「最近夢の中に入ることが多いな……」

そう呟き周りを見る。

周りには何も無い。

光も無い。

だからと言って何も見えないと言う訳ではない。

寒くも無いし暑くも無い。

「別に何か危険がある訳ではないけど……」

警戒を怠る訳にはいかないな……」

周りには武器も無い。

俺は夢の中にも武器を持ちこめる筈だが……だめだ、現れない……

俺の力を誰かが拒んでいるな……

つまりこの夢は誰か俺よりも力が強い人の夢か……

厄介だな……

もし、敵の夢なら飲み込まれる可能性が……

「久しぶりじゃの、一刀よ」

「え？」

声のした方向を見るとそこには俺の祖父の『北郷秀刀』が立っていた。

「爺ちゃん！？何で!？」

「ふおっふおっふおっふおっ、一刀よ悩んでおるようじゃのお」

「ああもし、鋼牙さんが敵のボスだったら……そう思ってしまうんだよ……」

「ふおっふおっ、それが当たり前じゃ。

あの若者はお前にとって兄の様な男じゃったからの。

俺もお前と同じ様な立場じゃったら……はてさて、どうしておったかの」

「爺ちゃんでも迷うんだ……」

爺ちゃんが迷うことなんて滅多に無いのにな。

「当たり前じゃ。

一刀よ、迷うのもよいがあまり大切な者達を心配させるでないぞ?」

「ああ」

俺はそう返事をして立つ。

「爺ちゃんもう行くよ」

「うむ、ではの」

爺ちゃんは杖を出して杖を縦に振って空間に切れ目を創る。
俺はそれを見てその切れ目に飛び込んだ。

「またの、一刀」

そう、爺ちゃんは呟いた様な気がした……

一刀の部屋

「ん……ん〜！」

夢から覚めた俺は起きて立とうとする。
すると、俺の寝台には三国の王が寝ていた。

「看病してくれてたのか……」

俺は三人の頭を撫でながらこう言った。

「俺はこれからも悩むかもしれない……
それでも……皆を頼らないなんてことは無いから……
俺がやっていくことを手伝ってくれよ？」

俺はそう言ってもう一度寝台に横になり意識を手放した。

三十七話 悩みの果てに（後書き）

10/14タイトルが書いていないのに気が付いてタイトルを付け加えました。

本当に申し訳ありませんでした。
では、また次回をお楽しみに！

三十八話 会議

今俺は玉座の間に居る。

三国を統合する話についての会議だ。

「つまり、一度蜀と呉を魏に併合して俺が魏の王になれば良いんだな？」

「ええ、その時曹操さんがあなたの大徳やら何やらをたたえることを言えば良いんです」

「何やらって何だ何やらって……」

「では、皆さん何か言いたいことはありますか？」

こいつ無視しやがった……

ホントにこいつひでえな……

「魏は無いわね。」

部屋に戻って一刀の大徳を讃える口上を考えないと……

桂花、凜、風、もし一番良い物を考えた子にはご褒美をあげるわ」

「じ・ほ・う・び・の為に頑張ります！」

桂花、ご褒美の部分を強調しなくても分かっているから別に良いよ……分かってるから。

「華琳様の……ぷはあっ！」

「りーーん！」

あの量はやばい！

ちょー！何で俺を見た瞬間にまた血を出すんだよ！

「はい、トントンしますよートントーン」

「おい！風、何で凧は俺を見た瞬間また鼻血を出したんだよ！」

「……相変わらず鈍感ですね
では、部屋に戻るのです」

「おい、待て！」

引き摺ってる！風！やばいつて！
ホントに風は凧の親友かよ！？
もう見えなくなった……

「呉も無いわ。」

冥琳、手伝って」

「良いだろう。」

凧、亞莎付いてきなさい」

「は、はい」

「はーい、分かりました」

あなた達、さっきの光景に対して何の反応も無しっすか？
ひどくないですか？

「蜀も無いよ。」

朱里ちゃん、雛里ちゃん手伝ってね」

「あわわ、頑張りましゅ！」

「はわわ、頑張りましゅ！」

朱里、雛里……カミカミだよ……
でも可愛いから許す！

「さて、一刀さん。」

あなたはあの札を調べてください」

「あの札って……ああ、鋼牙さんの札か」

「ええ、今こちらに居る直属護衛者の中で能力の扱いが上手いのは
あなたですから」

「はいはい……那美と周牙は手伝ってくれないのか？」

「「めんどくさい」「」

この二人は……！

「私は仕事がありますので」

こいつは仕方ない……仕方ないけど何故かいらつく！

「では、よろしく願いします」

美恵はお辞儀をしてその場から去って行った。
その後周牙と那美を捕まえて無理矢理札を調べるのを手伝わせたが
特に何も分からなかった。

三十九話 一刀成都へ part 1

何でこんなことになったんだろう……

俺達は蜀と魏を併合する為に成都に来たんだ。

因みに魏の面子で付いて来ているのは華琳と華琳の護衛役の春蘭。そして呉の面子は居なくて蜀の面子は全員居る。

成都に着いてから天和達のライブがあるから見に行こうと桃香に言われて

見に来たんだが……

「桃香様に近づくな！」

「ぐへえっ！」

「華琳様に何をしようとしていた！」

「がはあっ！」

何で乱闘になっているんだろうか？

事の始まりはライブが始まった時。

桃香と華琳がライブのテンションに着いて行けなかったんだ。それで地和が……

「そこ！もっと盛り上げないと歌わないよ！」

と、まさかの宣告。

ファン達はそれで激怒して桃香と華琳に襲い掛った。

すると焰耶と春蘭がマジギレし乱闘が始まった。

焰耶達は桃香達の言うことを聞かずに暴走しファン達を吹き飛ばし

ている。

桃香と華琳は二人を止めようと努力しているが一向に止まらない。蜀の面子も止めようとしているが結果は同じだ。

恋も頑張ってくれてるけど倒しても倒してもゾンビの様に復活して襲い掛って来る。

「ご主人様！皆を止めて！」

「一刀！早くしなさい！」

二人共余裕なんて無い様な表情で俺に懇願してくる。

俺も男だ。

あんな地獄みたいな所に行くのは嫌だがもう既にあそこに何人も女の子が居るんだから俺も行かないと男としての度胸が疑われる。

流石に武器を使う訳にはいかない。

格闘で行くしかない。

まずは地獄へ突撃だ！

「おらぁあつ！」

もしあの世に行ったら立派な墓を立ててくれよ？

華琳、桃香……

あれ？俺フラグ立てた？

「あいつかつこよくな？」

「ああ言うのがモテるんだよな……」

「あいつを殺せえええつ！」

うん、立派なフラグが立ったね

あれ？何で桃香と華琳は手を合わせているのかな？

これやばいんじゃない？

ほらファン達が皆俺に向かって襲い掛って来るよ？

これ俺死ぬんじゃない？

「ってこんな所で死ぬるかああああっ！」

俺は死ぬ訳にはいかないんだああああっ！

「ごめんなさい……」

ただいま地和は反省中。

何とかファン達を倒して愛紗がファンを煽った地和を説教している。

「ご主人様に何かあったらどうするつもりだったのだ！
そもそも……」

因みに天和達も貂蝉から記憶を映してもらったらしく天和と人和は俺に甘えている。

……そのお陰で黒いオーラが見えるんだけどね。
多分愛紗もそれで機嫌が悪くなってるんだろう。

「兄も節操の無さすぎにゃ……」

「ぐはあっ！ま、まさか美似に言われるとは……」

美似はそんなキャラじゃないと思ってたのに……

「お館様の節操が無いのは前から存じておりましたがこれはやり過ぎだと思いたがの」

桔梗の言葉に全員が頷く。

多分別の世界に俺が行けたらもう少し自重してくれって頼みこんでるだろうな……

「ねえねえ、一刀、私一刀と一緒に出かけたいなあ」

「「「！」「」」」

「ああ、良いよ。
なら人和も行くかい？」

「行く」

地和に聞くと『まだ説教中です！』って愛紗に怒られそうだから秘密に連れて行ってあげよう。

……後ろの黒いオーラは気にせず。

しばらくして街

「いや〜こうして三人で街を歩くのは久しぶりだな〜」

三人は俺の近くを歩いてた。
最初は天和と地和が俺の腕に抱きついてきたがそれだと人和が不満そうな顔をする事になるから

腕に抱きつくのはまた今度の機会ということになった。

「そうだね」

最近全く会え無かったからね」

「全く……一刀をちい達も探したんだからね！」

「姉さん達の言う通り」

「返す言葉も無いよ……」

そんなやり取りをして笑っていると

「おい！その奴！動くんじゃねえ！」

「ん？」

前に短剣を持って少女を拘束している男が居た。

男は俺の方に剣を伸ばしている。

俺は考えるよりも先に短剣を握っている方の手首を蹴る。

すると、男の剣は落ちてしまう。

それを見て俺は少女を拘束している方の手を握った。

すると

「い、いででで！な、何なんだ！この握力は！」

割と本気で握ってるからなあ。

そう言えばこの前少しキレて十円玉を握った時に十円玉が見るも無残な形になってたっけ？

「今すぐこの子を離せ。」

「さもないと……お前の手は無残な形に変わるぞ?」

「わ、分かった!だから離してくれ!」

男はそう言いながら少女を解放する。

俺は男の手を解放する代わりに男の鳩尾に拳を一発くれてやった。

「小さい女の子を人質に取る奴には遠慮はするなって姫に良く言われてるんでね」

男が気絶すると男に捕まっていた少女の母親らしき女性が俺に礼を言つて来た。

「ありがとうございます!お陰で娘も助かりました!」

「いいえ構いませんよ」

そんなことを言っていると愛紗と凧が走ってこちらにやってきた。

「「ご主人様(隊長)!」」

「やあ、二人共。」

こいつ、牢屋に閉じ込めて」

「「はい!」」

流石二人共正義感強いな。

兵達に次々と指示を出して男を牢屋へと連れて行かせた。

「あの……関將軍に指示を出せるお方と言うことはそれなりの……」

「うむ、このお方は丞相北郷一刀様だ」

「え……」

あ、周りの時間が止まった。
そして……

『えええええええつ！？』

あゝあ……ギリギリまで隠しておきたかったのに……
はあ……

酒家

俺が丞相だとバレた後皆堅苦しい挨拶をしようとしたので俺は堅苦しいのは嫌いだと言って酒でも飲もうと言ったら酒盛りになった。
……勿論愛紗達は良い顔をしなかったけど。

「丞相様、こちらもどうぞ」

「はいはい」

何だろう……

今この人に酒を注いでもらった瞬間にものすごい殺気が……
気のせい……だよな？

「いやゝしかし丞相様もいける口ですなゝ
丞相様は既に二十本は飲んでいるではありませんか」

「ふっ、そう言う長老も同じくらい飲んでるじゃないか
何なら飲み比べるか？」

「良いでしょう」

その後酔い潰れて愛紗達にたっぷりと怒られたのは言うまでも無い
……

四十話 一刀成都へ part 2

「俺を殺そうとしている者達が居る?」

桃香の城の俺の部屋で朱里から知らされたのは俺を殺そうとしている者達が居ることだった。

「はい。ですから、出来る限り一人で行動しないで欲しいんです」

朱里はそう言って心配そうな顔をする。

彼女の気持ちは分かってる。

「分かった。街に出る時は必ず護衛を付けるよ」

それを聞いて朱里は満足そうな顔をして朱里は俺に抱きついてきた。そして、朱里が何をして欲しいのか分かり俺は朱里を抱き締める。

「雛里が怒るよ?」

「ご主人様にお任せします……」

「全く……」

そして、俺はその長い夜を朱里と共に楽しんだ。

朝になって

俺は星を護衛にして街に出ていた。

「昨日は朱里で今日は私ですか？」

「俺を性欲の塊みたいに言わないでくれないか？」

「ははは！そうでしたな！主は英雄でした！」

「『英雄色を好む』だっけ？同じ事だろ？」

「ははは！」

しばらくそんなやりとりをしながら歩いていると星が俺にぴったりにくつついてきた。

だが、その表情はまさしく武人の顔だった。

「主、気付いておりますか？」

星が言っているのはさっきからついて来てる奴等だろう。
思春達に比べればまだまだ子供だ。

「なめるなよ。」

次の曲がり角を曲がって裏道に入ろう」

「御意」

曲がり角を曲がって裏道に入り後を向くとそこには短剣を持った男達が居た。

その男達を見て星は固まってしまった。

「お前達は私の部隊の……！」

それを聞いて俺は分かってしまう。
最早星はともに戦えないと。

「星！少し下がってろ！」

相手は十人。

充分手加減して倒せる！

「ふっ！」

一撃必殺で敵を倒していく。

そして、その男達を全員気絶させた。

「星、今は辛いかもしれないけど……」

「分かっています」

「そうか……応援を呼んでくる。

ここは任せた」

「御意」

その後応援を呼んで俺達は城へと戻った。

四十一話 一刀成都へ part 3

星の部隊の兵に襲われた後俺は今成都の城の玉座の間で軍議に参加していた。

「襲ったのが星ちゃんの部隊の……」

「申し訳ありません……」

星は先程からずっと俯いている。

しょうがないと言えましょうがない。

でも、今の俺の立場は魏の客人。

その客人が蜀の兵士に襲われたとあれば蜀の立場は一気に悪くなるだろう。

「ご主人様、ご主人様を襲った兵は何と？」

先程俺は襲った兵士の尋問をした。

それで襲った理由は大体分かったんだ。

「ああ、それは……」

回想シーン

「で？何で俺を襲って来たんだ？」

「……………」

さつきから何も言わずかれこれ三時間が経っている。

しょうがない……ホントならばこの手は使いたく無かったんだが……

「三国の将の中で誰が好きだ？」

「関將軍です！」

はい、落ちた。

取りあえずテンション上げていくか。

「分かるぞ！」

あの大きい胸！あの美しい髪！

彼女に弱点は無いよな！」

「分かってくれますか！」

「ああ！俺達は同士だ！」

「同士！」

そう言つて俺達は抱きあう。

そんな趣味は無いがこいつが分かってくれる奴で良かった。

ここからは聞いて無くても教えてくれる筈だ。

「実はですね！あなたが関將軍を騙して凌辱しようとしているとある男が言つたんです！」

これは聞き捨てならないな。

俺を貶めようとしている者が居るってか。

「それは城で見たことがある奴か？」

「いえ、見たことが無い男でした」

成程……今回の敵が俺を殺す為にデマを流した。
そんな筋書きか。

「分かった。ありがとう」

そう言っただけ俺は別の奴の尋問をした。

時は戻って玉座の間

「敵なのだ（でしゅ）！」「」

「一刀？覚悟は良いかしら？」

回想が終わっていきなり玉座の間が修羅場に変わった。
やばい怖い……特に華琳が怖い……

「あ、あのな！俺だって兵士から話を聞かないといけなかったの！
それと他の奴も同じような理由だった！」

「あら、ごめんなさい。」

それより今回の敵がこの地に居ると思っても良いのかしら？」

「多分良いと思う。」

それと全員が若い男に言われたって言うてたよ」

「そう、分かったわ。

ここは兵士全員に一刀はそんなことをしないと通達した方が良さそうね」

「ああ。俺はこれで」

俺はそう言って玉座の間を出ようとする。
そこで華琳が

「待ちなさい、一刀」

そう言って俺を引き留めた。

「何だい？華琳」

「私に隠してる事は無いわよね？」

「無いよ」

俺がきつぱりとそう言つと華琳は

「そう……分かったわ。

言っても良いわよ」

そう言つて俺を解放してくれた。

俺は言葉に甘えて自分の部屋へと戻って行つた。

一刀の部屋

「危なかったなあ……」

最後の兵士を尋問していた時に最後の兵士はこう言った。

『首に黒く輝く十字型の何かを下げていました』と

この時代にそんな物がある訳が無い。

あるとしたら俺や直属護衛者の様に別の世界から来た者だ。

それに聞いたら十字の真中には骸骨があったと言う。

それは鋼牙さんが世界で三つしかないと言っていた超プレミアの物だ。

別の世界では売れて無かったからしょうがなく俺達の世界で八方手を尽くして手に入れたらしい。

もしかしたら本当に鋼牙さんは……

「生きてるのか？」

だったら何で俺を貶めるようなことを？

何でだ……

「考えても何も出ないか……」

俺はそう呟いてゆっくりと寝台に横になって意識を手放した。

四十二話 一刀成都へpart 4

俺は今愛紗を護衛にして俺を襲った兵士が怪しい男と接触したと言う場所に来ている。

ここはあまり人氣が無い。

秘密の話をするのには相当良い場所だ。

「何かしらの形跡は無し……」

流石鋼牙さんだな。

犯人が鋼牙さんと決まった訳じゃないが……

「ご主人様、どうですか？」

「何にも無い。」

犯人は相当慣れてる奴だ」

鋼牙さんって真正面からの戦いは勿論

情報戦や政治的な戦い方もすごいからなあ……

はつきり言ってるあの時幻で勝てたのは多分幻の鋼牙さんの強さが昔と同じだったからだろう。

もしあの人の強さが昔よりむ強くなっていたら……

そんな嫌な想像を振り払い俺は愛紗にこう言った。

「これ以上調べても何も出ないな……」

そろそろ帰ろう」

俺はそう言って立ち上がる。

そしてゆっくりと城へと歩いて行く。

愛紗も俺についてくる。

そんな時……

「久しぶりだな、一刀」

そう呼ばれて声が聞こえた方を見る。

そこには俺が最も尊敬し畏れた男が居た。

直属護衛者の中では霸王と言っても過言では無い男。

「ご主人様、この者は一体……」

「俺の恩師だ。」

そして恐らく……」

「今回の敵だぜ」

そう言った鋼牙さんの表情は狂気の笑みだった。

俺にとっては一番見たく無かった表情。

俺の緊張感はそれを見て一気に膨れ上がった。

俺は記憶刀を抜いて構える。

愛紗も青龍堰月刀を構える。

「いやゝいいねえ……」

彼の関雲長や成長した一刀とやり合えるなんて夢みてえだ……

俺を失望させるなよ？」

「っ！」

無理だ……

今の俺ではこの人には勝つことが出来ない……！！

そんな警報が頭の中で鳴り響く。

「愛紗！俺が時間を稼ぐ！

誰か呼んで来てくれ！」

「ご主人様！？何を言い出すんですか！」

「頼む！俺達だけではこいつには勝てない！」

愛紗は最後まで渋っていたが城に向かって走って行ってくれた。

「始めるぞ」

「さて、俺に勝てるかな？」

「やってみなくちゃ分からないだろうが！」

俺は気を使って全力の速さで斬りかかる。
だが鋼牙は簡単にそれを受け止める。

「簡単だぜ」

そう言って啓雅は俺の鳩尾に一発正拳突きをしてきた。

「ぐっ！」

重い……！

気を纏ってこれか！？

これじゃ気を外せない！

「どうした！どうした！まだまだ行くぞ！」

「ぐっ！」

鋼牙のあまりの猛攻撃に俺は一度距離を取る。
それでも鋼牙の猛攻撃は止まない。

鋼牙に幻なんて効かないから幻も出来ない。
このままでは鬺り殺しだ……！

「終わりだぜ。

さよなら」

「くっ！」

鋼牙は俺の刀を吹き飛ばした。
そしてそのまま刀を振るった。
俺の意識はそこで消え去った。

四十三話 一刀とある老人との出会い

俺はどうなったんだ……

鋼牙に斬られて……

それで……

「ここは？」

俺が見たのは知らない天井だった。

まあ、簡単に言えば山小屋を想像すれば良い。

「気が付いたかの？」

「え？」

声のする方を向くとそこには一本の杖を持っている爺さん。

ただの常人が見ればただの爺さんだろう。

だが、分かる奴が見れば……

「あんた何者だ？」

見れば分かる。

俺や姫なんてこの爺さんから見ればただの子供だ。

力で戦えば一瞬で負ける……！

武器は……

くそ！爺さんの後だ！

素手で勝てる様な相手じゃない！

「ふおっほふおっほ！そう警戒するでない。

僕はお主の主と同じ様な存在じゃ」

「管理人か？」

いくら相手が管理人だろうが警戒は解かない。
いや、解ける筈が無い！

この爺さんを前に警戒を解いたら一瞬で死ぬ！

「そうじゃ。

でも、警戒は解かぬようじやのう……
ならば見せてやろうぞ。

お主を助けた時のことを」

そう言うとその爺さんは一瞬で俺の後に移動した。

「なっ！？」

この俺が目で追え無かった！？
こいつ……

「ほれ、トンつと」

爺さんは俺の後頭部を杖の先で殴った。

すると俺の意識がどんどん遠くなり俺は意識を手放した。

時は戻り成都

「ふう……終わったぜ」

これは……あの時の記憶……いや、情報か。
どうやらあの爺さんに見せられてるらしい。

「さて……殺すか」

そう言つて鋼牙さん……いや、鋼牙は剣を振り上げる。
そして、振り下ろした。
その時！

バアアッン！

鋼牙の剣は飛んで来た火の玉の所為で剣を落としてしまった。

「それはさせんよ」

そう言つて杖を突き出しているのは俺を救つた爺さんだった。

「お前……はあゝん。

成程ゝお前、中立派じゃなかったのか？」

「そんなこといつ誰が言つた？

儂は外史の肯定派じゃ。

それより儂とやるのか？

お主死ぬぞ」

その言葉と共に爺さんの殺気が一気に膨れ上がる。

くっ……！この俺が……耐えられない！

「分かつたよ。

なら、一刀は一端諦めてやる。
それじゃあな」

そう言つて鋼牙は消えて行つた。
するとそこで記録は終わった。

時は戻り山小屋の様な場所

「大体分かった。
でも、あんたのことは完全には信用しない」

記録が終わつて俺はそう言つた。
爺さんはそれでも良いと言う様な表情をした。

「ところで、お前さんはそのまま帰つてもあの若造に勝てるか？」

「っ！」

勝てない。

今回は手も足も出ずに負けたんだ。

「ならば、俺が修行をつけてやろっ」

「何？」

「二年で相当強くしてやろっ。
ああ、三国の心配はするでない。
俺の仲間が守るでな」

俺は少し考えて頭を下げてこう言つた。

「よろしくお願いします。」

俺の名前は北郷一刀です」

その言葉を聞いた爺さんは俺に自己紹介をした。

「俺の名は南華老仙じゃ」

これが俺と彼の南華老仙との出会いだった。

四十四話 三国緊急会議

第三者視点

一刀が居なくなってから緊急で洛陽に三国の将が集まって会議を始めた。

三国を統合する計画は一端中止され三国はこの大陸中で一刀を探していた。

「思春、何か一刀に対しての情報はある？」

思春は調査の責任者だ。

八方に手を尽くし調査している。

だが……

「ありません……」

大陸中を探しても一刀の情報は無かった。

その報告に三国の将は肩を落とす。

そんな時に一人の兵士が扉を開き玉座の間に入って来た。

「失礼します！」

それを見て周瑜が対応する。

「何事か！」

「北郷様の情報を持っていると言う者がここに来ました！」

その言葉を聞いてその場に居る全員が驚愕の表情を浮かべる。
そんな中でも冷静な周瑜がこう言った。

「通せ！」

それを聞いた兵士は玉座の間から出ていく。

そしてしばらくして兵士が四人の男女を連れて来た。

……若干二名が男か女か分からないが。

「あ！貂蝉さん！」

桃香が立って指を指しながらそう言つと貂蝉は手を振った。

「お久しぶりね」

劉備ちゃん」

その場に居る者は吐き気を必死に堪える。

「貂蝉、その三人は誰なのかしら？」

華琳がそう聞くと三人は自己紹介を始める。

「于吉と申します」

于吉と名乗った青年はそう言いながらお辞儀をする。
今度は于吉と同じ位の年の青年が自己紹介を始めた。

「左慈だ」

左慈と名乗った少年は少々鋭い目つきで全員を睨んでいる。

「卑弥呼である」

全員が名乗り終わった時雪蓮が貂蟬に尋ねた。

「貂蟬、一刀はどこに行ったの？」

その問いに貂蟬は首を横に降りこう言った。

「今はまだそれを教える訳にはいかないのよ」

「どうして!？」

そう怒鳴ったのは蓮華。

貂蟬はこう続けた。

「彼は今日から二年間修行を始めるの。

今の彼なんか足元にも及ばない位に。

あなた達も勿論修行を受けてもらっわ」

「ちょっと待ってください！

私達は三国を併合させなければいけないんです！」

朱里がそう言うのと于吉がこう言った。

「そこはご安心を。

創！」

于吉がそう叫ぶと于吉の隣に朱里にそっくりな少女が現れた。

「はわわ！私でしゅ！」

「どう言うことなんだ！？」

「何をしたんですか！？」

戸惑っている三国の将を見て左慈が説明を始める。

「于吉は仙術を使えるんだ。
こんなことだつて簡単に出来る」

「成程……これを使って三国を併合。
その間に私達は修行を受ける。
でも、誰の修行を受けるのだ？」

「私と左慈のです。
軍師は私が修行つけます。
武将の修行は左慈です」

「お前達が目指すべきなのは今の北郷以上だ」

「「「！」「」」」

その言葉に全員驚愕の表情を浮かべた。
一刀は恋と善戦した。

しかも、その時は一刀の精神状態が悪かった時。
もし、万全の状態だったら……
一刀は勝てていただろう。
それ以上を目指せと言うのだ。

「良いですね。

反論は許しませんので。
では、開！」

于吉がそう言っていると空間に亀裂が走る。

「この中にお入りください。
修行場へと繋がっています」

于吉がそう言っていると華琳、雪蓮、桃香が亀裂に近づいて行く。

「桃香様!?!」

「雪蓮姉様!?!」

「華琳様!?!」

「私は行くよ。

ご主人様の足手纏いになりたくないから」

そう言つて桃香

「行かなくちゃいけないのよ。
守られてばかりは嫌だから……」

それに続き雪蓮

「一刀は頑張っている。
私達も頑張らなければね……」

そして、華琳が入って行つて。
それを見た将達は次々と入って行つて少して全員入った。

「北郷殿は愛されていますね」

「そうだな。」

その上節操が無い」

「それを言っちゃお終いよ。」

ご主人様はそう言ってお方なんだから」

「それより左慈、于吉よ三国の将達のこととは頼むぞ。
ある意味お前達に三国の運命はかかっていると行って良い」

「分かってる。」

行くぞ、于吉」

そう言つて左慈は亀裂に入つて行つた。
それを見て于吉も亀裂に入つて行つた。

四十五話 二年後

「ふう……」

溜め息をついたのは霸王曹孟徳。

真名を華琳。

二年の月日が流れ風貌や顔立ちは大人びた物になった。

「華琳、どうしたの？」

そう尋ねたのは現孫呉の王。

孫仲某。真名を蓮華。

因みに姉の雪蓮は雪蓮の部屋で縛りつけられている。

「今日が丁度『あの日』から二年だと思ってね……」

一刀と別れてから二年。

彼女達は成長した。

武は駄目駄目だった桃香もきちんと嘗ての一刀以上になった。

「今日はご主人様が帰って来る日だもんね……」

ちゃんと街に着いたかな？」

「着いたでしょう。」

子供では無いのだし」

そんな噂の本人はと言うと既に洛陽に着いていた。

洛陽城下街

「皆どうしてるかな？」

そう言いながら歩いているのは北郷一刀。

『盾』の運命を背負った者としてこの大陸に降り立った。

「早く城に行こう」

皆に会える。

そんな思いから足取りが速いものなる。

そんな時に前から男の声が聞こえる。

「おい！この餓鬼殺されなくなったら金を用意しろ！」

「こんな奴はやっぱり居るんだな……」

そんな一刀は呆れた顔になり鬼神弓を構える。

「おい！そのの！この餓鬼の命がかかってるんだぞ！

その弓を捨てろ！」

気で矢を作って一刀はそれを男が持っている剣に向かって放った。
だが、その矢は剣に当たり鈍い音を鳴らしただけでその剣を砕くには至らなかった。

「はっ！何をするかと思ったら！」

男がそう言つと一刀はこう言った。

「あんたの剣の命は終わったよ」

「あ？」

男が剣を見ると

パンッ！

そんな音を立てて剣が砕け散った。

「はあっ！？」

「『砕気矢』俺の気を纏わせ放つ矢だ。

その矢に当たった物は中から俺の気が破裂し砕ける。

素直に人質を解放しろ。

じゃないと……」

一刀は気の矢を作りこう言った。

「次はあんたの頭に矢を放つ」

狙いは確かに男の頭。

男は素直に人質を解放した。

それを見て一刀は懐かしい名を呼ぶ。

「凧！紗和！真桜！」

一刀がそう呼んでしばらくすると轟音が遠く聞こえてくる。
その轟音の主は一刀が愛する者の内の三人。

「「隊長!」」」

三人はそう言いながら一刀に抱きつく。

一刀はそれを受け止めて三人の頭を撫でた。

「再開の挨拶は後でな。

取りあえずその男を牢屋に入れておいてくれ。
俺は城に戻る」

「はい!」

「お任せなの」

「任せとき!」

そう言つて三人は男を縄で縛つて連れて行つた。

「さてと……城へ戻るか」

一刀はそう呟いて城へと向かった。

少し経つて城

「失礼します!」

そう言つて一人の兵士が玉座の間に入つて来た。
それに華琳が対応する。

「何事か!」

華琳がそう言つと兵士はこう返した。

「北郷様にご帰還なさいました!」

その報告にその場に居る者は表情になつた。

「連れて来なさい」

「はっ!」

兵士はそう返事をして玉座の間から出て行つた。
少し経つて兵士が一刀を連れて来た。

「色々聞きたいことがあるけど……まずはこの言葉を言つよ」

一刀は一端そこできつてこう言つた。

「ただいま!」

その言葉にその場にいる者はこう返した。

「「「お帰りなさい!」「」「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780v/>

盾としての運命を背負った御遣い

2011年11月14日02時44分発行